

建設産業人材確保・育成推進協議会

建設産業人材確保・育成推進協議会（略称：人材協）は、行政機関と多くの建設産業団体により組織され、建設産業における若者の担い手確保・育成・定着を推進する活動を行っています。

いのちを守り 未来をつくる建設産業

／ 若年担い手の確保に向けた取組や建設産業の魅力を発信！ ／
以下コンテンツをご活用ください！

Twitter

#建設産業人材協

人材協の取組や
建設産業の魅力を発信！



公式サイト

#建設現場へGO！

建設産業の
jobポータルサイト



YouTube

#人材協チャンネル

担い手確保・育成に関する
様々な動画を発信！



事務局：（一財）建設業振興基金

人材協のコンテンツ ～WEBやSNSによる広報展開～

人材協では、若年担い手の確保に向けた取組や建設産業の魅力を様々なコンテンツで発信しています！！

建設現場へGo！ (<https://genba-go.jp/>)



建設業団体等が広報している若年入職促進等に資する様々なコンテンツを集約したJobポータルサイト

18歳のハローワーク(<https://genba-go.jp/18hellow/>)



建設業を身近に感じてもらうとともに、就職に向けた手がかりとなる情報を発信、様々な職種紹介や技術者・技能者のインタビューを掲載

人材協Twitter (https://twitter.com/kikin_jinzaikyo)
人材協チャンネル (https://www.youtube.com/channel/UCM5_H7Hj4SrvrHf-7iE1Q)



人材協の活動や担い手確保・育成に関する情報をよりタイムリーに発信するためにSNS展開を開始



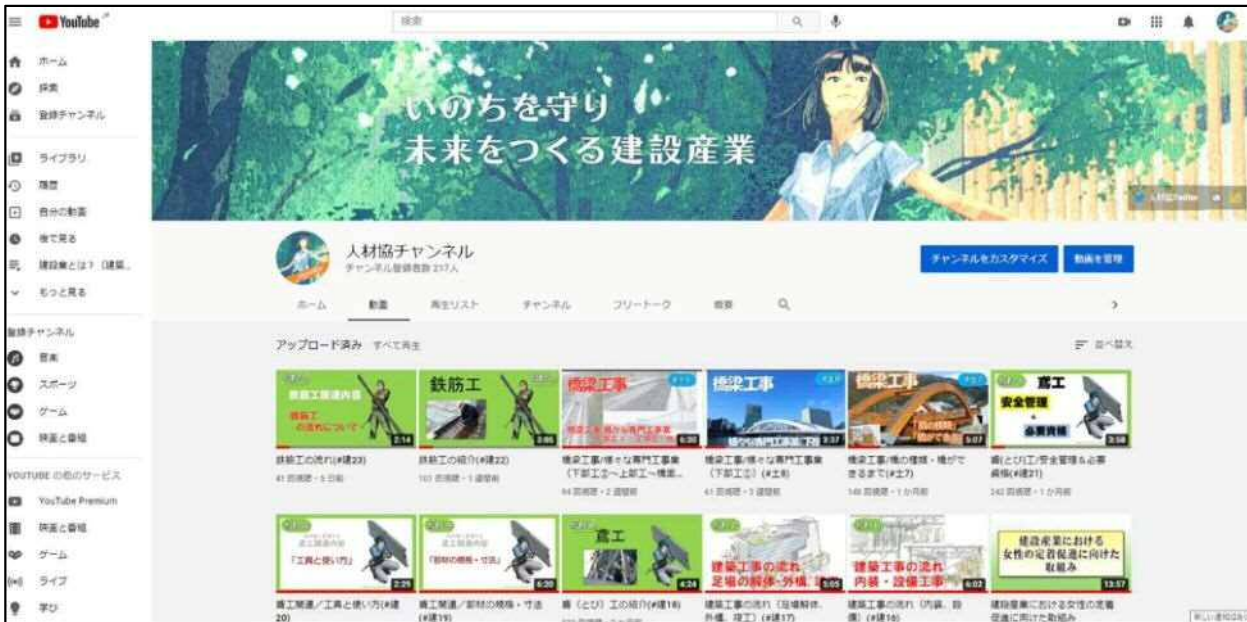
建設産業女性定着WEB
(<https://www.kensetsu-kikin.jp/woman/>)



建設産業女性定着支援ネットワーク登録団体の取組等、建設産業の女性定着に関する情報を網羅的に掲載。

ぜひ、学生にも広めていただき、御覧ください！！

人材協チャンネル(YouTube)の開設



○人材協が持っている担い手確保・育成に関する動画コンテンツを公開するため、独自チャンネルを開設しています。

○建設産業に関する基礎知識等を見やすくコンパクトな動画で適宜配信しています。

【10月以降の配信動画】

- ・建設業の役割とその魅力(#建築工事編 第1章)
- ・建築物の主な構造種別(#建築工事編 第2章)
- ・計画から竣工までの流れ(#建築工事編 第3章)
- ・各種工種(鳶・鉄筋・型枠・左官・鉄骨 等)(#建築工事編 第4章)

各地域の取組み等を配信している「建設現場へGO！」

建設現場へGO!

建設業の資格 動画 イベント サイト情報 キーワードを入力してください 検索

カテゴリ 地域 専門業種 対象 目的

カテゴリ: 見る, 知る, 働く, 就職ナビ, 建設業界のしくみ, 地元建設業の役割

地域: 東京都, 北海道, 神奈川県, 千葉県, 大阪府, 愛知県, 奈良県, 福岡県

専門業種: 土木工事, 電気工事, 建築工事, 鉄筋工事, 左官工事, 塗装工事, 大工工事, 造園工事

対象: 小学生以下, 中学生, 高校生, 保護者, 大学生・大学院生, 新卒・指導者・教育機関

目的: 女性の定着, 先輩のシゴト場, 見学・イベント情報, 就職ナビ

お知らせ

2020.06.01 建設現場における女性の定着促進に向けた取組が決定！ New

2020.06.01 令和2年度学生コンクールの応募書式ダウンロードサイトのご案内 New

2020.06.01 「高校生の作文コンクール」過去の受賞作品 New

2020.06.01 作文コンクール「私たちの未来」過去の受賞作品 New

2020.04.15 「高校建設現場見学会CM」動画のご紹介

イベント情報

イベント: かながわ建設フェスタ in 日本大通り 4月30日 9:00 AM - 5月2日 5:00 PM

セミナー: 第6回 日本建設士会 女性ネットワークの会 講演会 6月6日 9:00 AM - 6月7日 2:00 PM

研修: 【福岡】建設現場実習研修 新卒研修 6月10日 9:00 AM - 6月12日 3:00 PM

会議: ひろしま建設フェア2019 6月13日 9:00 AM - 6月14日 5:00 PM

会議: 千葉建設研修フェア 5月20日 9:00 AM - 5月21日 5:00 PM

○建設業団体等が広報している若年入職促進等に関する様々なコンテンツを集約したJobポータルサイトです。

○このポータルサイトでは各県の建設業団体で作成している教材やイベント情報、地域で建設業が取り組んでいる内容等も掲載しており、多くの建設業に関する情報が盛り込まれています。

○人材協の取組についても、掲載しています。

建設産業の仕組みを紹介する「18歳のハローワーク」



○建設業への関心を持った工業高校在校生等を対象に、**建設産業の仕組みに関する情報を提供**しているホームページです。

○このホームページでは、ビルやトンネル、橋等の建設物をつくるにあたり、どのような業種が関わって作られているのかも分かり、**建設産業について、理解を深める**ことができます。

○また、技術者や職人のインタビュー内容もあり、**入職後のイメージがしやすい**ホームページとなっています。

**知っている？
建設工事は、建築と土木の
2つに大きく分かれる**

建設業は大きく分けると「土木」と「建築」に区分され、仕事の内容には大きな違いがあります。土木工事は、道路やトンネル、河川や橋、水道などのインフラ整備（社会資本整備）があり、私たちが生活するために必要な生活基盤を整備する工事です。その多くは、公共工事として発注されています。

一方、建築工事は、住宅・学校・病院などの建物を建築する工事です。

また、建設業は、工事内容や施工方法の違いから29業種に区分されており、そのうち土木一式工事業と建築一式工事業の二つは「総合的な企画・指導・調整のもとに土木または建築工作物を建設する工事」と定義されています。土木一式工事業または建築一式工事業を請け負うものを総合建設業者（ゼネコン）と呼びます。その他の27業種については、大工工事業や鉄筋工事業などの専門的な工事を請け負う専門工事業者に分類されます。



建設業しんこう

にはお役立ち情報がたくさん！
＝高校の取り組みをご紹介します＝

年10回発刊！WEBサイトでチェック！

建設業

しんこう Web

建設産業の今を伝え未来を考える



高校の先生にインタビュー

【最新号】 12.1月号 教員歴2年目の“新米先生”、母校に帰る！
目指すは、生徒の力となる恩師のような教員
・・・茨城県立下館工業高等学校



その他、建設産業の人材育成に関する情報も！



【バックナンバー】

- 7.8月号 第三者の「声」こそ自身も生徒も向上させる！
・・・群馬県立前橋工業高等学校
- 9月号 学びのプロセスに重点を置いた課題研究
「失敗」という成果が生徒を成長に導いた
・・・徳島県立徳島科学技術高等学校
- 10月号 台風被害の名残を課題研究で一掃！
身近なことをきっかけに都市計画を意識する
・・・神奈川県立向の岡工業高等学校
- 11月号 「実習」の面白さとは何なのか!?
事前の予備学習動画のYouTube配信が大活躍
・・・鹿児島県立加治木工業高等学校

check !



check !



check !



作文コンクールの開催

人材協では、全国の工業系高校に通う生徒達の**建設産業に抱くイメージや夢を発表**してもらうため作文コンクールを毎年開催！

今年で9回目を迎えた作文コンクールの応募総数は・・・

合計 **1,551** 作品

来年度は、5月中旬から募集開始予定です！多数の応募お待ちしております！！



主な入賞作品（R3年度）

国土交通大臣賞

タイトル	氏名	学年	学校名
笑顔のために	小泉 颯葵	1	山梨県立甲府工業高等学校
空間を創る	山岡 愛	3	愛媛県立松山工業高等学校

不動産・建設経済局長賞

タイトル	氏名	学年	学校名
地球を造る仕事	松野谷 湧星	3	山梨県立都留興譲館高等学校
建設業が与える力	島津 愛花	3	長崎県立大村工業高等学校
建設業が変えてくれた私の未来	宮口 真輝	3	熊本県立熊本工業高等学校

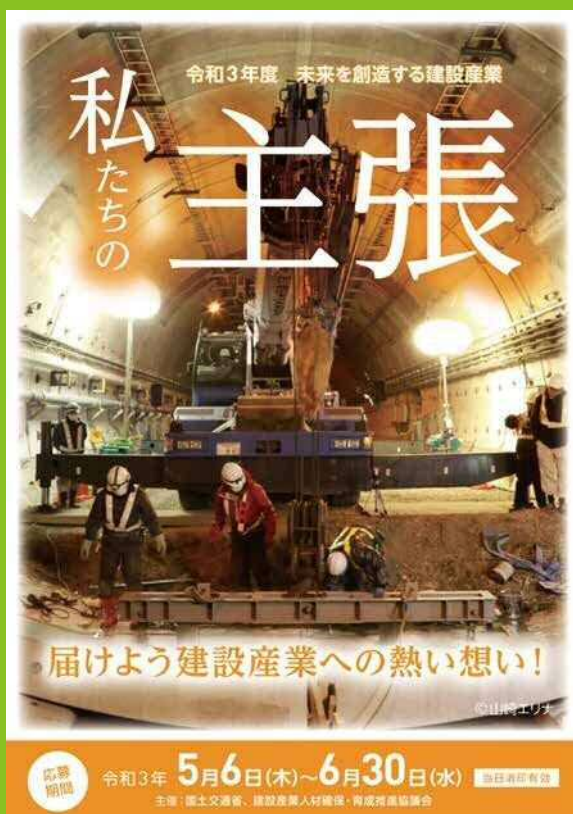
（応募テーマ：「建設産業でやりたいこと」「私が思う建設産業の魅力」）

令和3年度

作文コンクール 入賞作品集

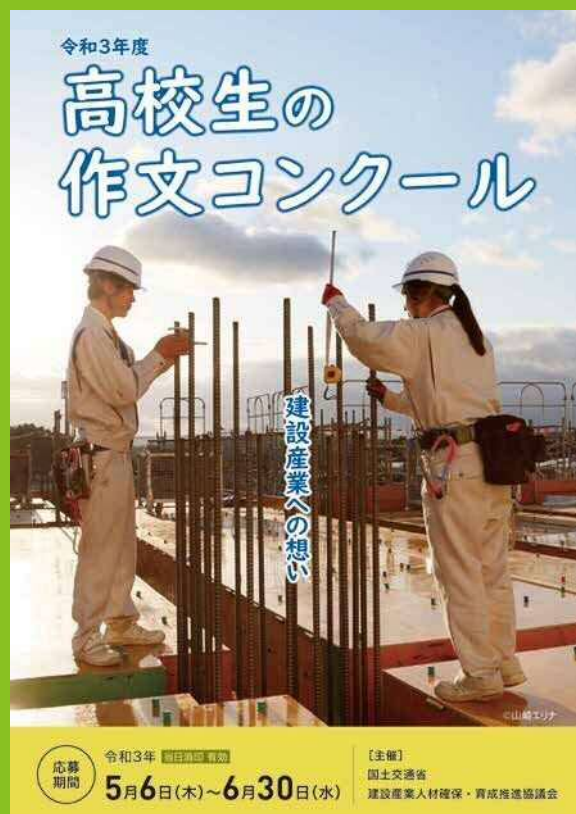
建設産業で働く方の作品

未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール



高校生の作品

高校生の作文コンクール



建設産業人材確保・育成推進協議会

令和3年度 建設産業人材確保・育成推進協議会 作文コンクール入賞作品集

選定結果

建設産業で働く方の作品 P3 (未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール)



国土交通大臣賞

小林朝幸	橋本電気工事(株)	神奈川県	「建設キャリアアップシステムが照らす建設産業の未来」..... P4
土田里沙	川瀬工業(株)	新潟県	「私の未来施工計画」..... P5



不動産・建設経済局長賞

今中将雅	電通設備(株)	北海道	「成功物語」..... P6
津田旭	(株)丸本組	宮城県	「妻とともに目指す現場監督」..... P7
木村友梨香	(株)新潟藤田組	新潟県	「母の背中と私たちの未来」..... P8



優秀賞

佐藤夏輝	(株)橋本店	宮城県	「建設業をまもるために」..... P9
大島璃来	伊藤工業(株)	秋田県	「女性の働き方」..... P10
Do Thi Quynh Hoa	(株)小野工業所	福島県	「グローバルな人材育成」..... P11
池谷実莉	(株)中村建設	山梨県	「好きなことを仕事に」..... P12
河合あゆみ	小林建設(株)	富山県	「もう一度、ここに。」..... P13

高校生の作品 P15 (高校生の作文コンクール)



国土交通大臣賞

小泉颯葵	山梨県立甲府工業高等学校 土木科1年	「笑顔のために」..... P16
山岡愛	愛媛県立松山工業高等学校 建築科3年	「空間を創る」..... P17



不動産・建設経済局長賞

松野谷湧星	山梨県立都留興譲館高等学校 環境工学科3年	「地球を造る仕事」..... P18
島津愛花	長崎県立大村工業高等学校 建築科3年	「建設業が与える力」..... P19
宮口真輝	熊本県立熊本工業高等学校 建築科3年	「建設業が変えてくれた私の未来」..... P20



優秀賞

黒古ひなた	栃木県立真岡工業高等学校 建設科3年	「叶えたいこと」..... P21
西宮朝央	栃木県立真岡工業高等学校 建設科3年	「苦勞の先に」..... P22
三枝蓮	山梨県立甲府工業高等学校 土木科3年	「わたしたち若者がどうあるべきか」..... P23
山下温葉	静岡県立科学技術高等学校 建築デザイン科2年	「見えない力」..... P24
栗本紗弥	静岡県立浜松工業高等学校 建築科3年	「宮大工を目指して」..... P25
鈴木阿季	静岡県立浜松工業高等学校 建築科3年	「リノベーションにかかる私の夢」..... P26
大原志織	福井県立敦賀工業高等学校 建築システム科3年	「大工を志した私の挑戦」..... P27
戸津川由羽	広島県立広島工業高等学校 建築科3年	「私が伝えるもの」..... P28
長屋磐雄	山口県立萩商工高等学校 電気・建築科2年	「守るべきもの、守れる強さ」..... P29
辻田陽彩	長崎県立長崎工業高等学校 建築科1年	「伝統をつなぐプロフェッショナルに」..... P30
上村妃向	長崎県立佐世保工業高等学校 建築科3年	「あたりまえ」..... P31
吉川美琴	長崎県立佐世保工業高等学校 建築科3年	「つなぐ」..... P32
吉川雄梧	熊本県立熊本工業高等学校 土木科3年	「将来への希望」..... P33

受賞作品の講評

運営委員長 古阪秀三

この作文コンクールは建設産業で働く皆さんからの「私たちの主張」と高校生の皆さんからの「高校生の作文コンクール」の2つの部門で成り立っています。

「私たちの主張」は、建設産業で働く方々の思いであり、今年で14回目となります。今年のテーマは「建設産業に望む未来」、「建設キャリアアップシステムへの期待」で、全国から397作品の応募がありました。最少年齢は18歳、最高年齢は67歳でした。また、女性の応募が今年は15.4%でした。さらに、30歳未満の若者の応募が約70%、一方では、仕事の第一線を退かれる頃になる熟練の先輩の方々が若者に伝えておきたいという意欲を持って、「私たちの主張」をしてくださいました。応募して下さった397人の方々に心から敬意と謝意を表します。

今年は国土交通大臣賞に輝いた方が2人いらっしゃいます。

まずは小林朝幸さん。小林さんは『建設キャリアアップシステムが照らす建設産業の未来』と題して、「職人さんは自身の経験、技量に見合うだけの賃金を稼いでいるか」に疑問を持ち、経験年数に関わらず「人工清算」の社会から、建設キャリアアップシステム（Construction Career Up System:CCUS）という業界全体を支える変革を促す政策について、期待を込めたメッセージが力強く具体的な説得力を持ってアピールされている。技能者の技能と処遇を、透明性をもって守るという本来あるべき姿をCCUSの中に見出し、期待する声、これらは広く社会に広報すべきものである。

2人目の大臣賞は土田里沙さん。土田さんは『私の未来施工計画』と題して、アパレル関係の仕事から建設業への転身、そしてその魅力と共に造る喜び、さらに見てくれる人が喜び、驚き、褒めてくれる喜び、それら多くの喜びを感じつつ、建設業の未来施工計画としてAI活用の夢を描いている。4週8休制実現のために活躍するAI、パイプレーター等体に負担のかかる作業を解決するAIなど、就労者の高齢化と若年層の定着率低下などを防ぐ意味でも重要な建設業の将来像が斬新に、また、まさに「建設産業に望む未来」が描かれている。

不動産・建設経済局長賞には次の3人が選ばれました。

今中将雅さんは、『成功物語』と題して、現在の発注者、元請、下請関係の一端と将来の夢を比喩的な表現で描いている。そうした中での「キャリアアップシステム」の登場。個人の能力に見える化するCCUSの可能性と期待を示す専門工事業の一社員の貴重な意見である。今後、元請・下請関係の中での技能者の処遇の改善が透明性をもって進むことを期待したい。

津田旭さんは、『妻とともに目指す現場監督』。ご自身の元請現場監督としての経験を振り返り、奥さんが同じ道を目指す決意、それを陰ながら支えていこうとする作者、これらが素直にユーモラスに表現されており面白い。とともに、今後の建設業にとっての女性や若者の様々な意見をいかに取り入れるかの実体験に基づく提言としても貴重である。

木村友梨香さんは、『母の背中と私たちの未来』。「私は、母が嫌いだった。」で始まる木村さんの作文。「いつも仕事で忙しく私を相手にしてくれない母」、「建築という存在に母を取られていた気分」、そんな中で「母に振り向いてほしくて、母を救いたくて始めた建築」……。木村さんの言わんとするところは「女性、男性お互いが働きやすい環境とは、・・・を考えるだけではなく、実行に移せているかを見つめなおすこと」にある。貴重な警鐘である。

一方、「高校生の作文コンクール」は、全国の高校の建築学科、土木学科等で勉強をする若者が建設産業に抱くイメージや夢を発表するもので、今年が9回目です。今年のテーマは「建設産業でやりたいこと」、「私が思う建設産業の魅力」で、全国から1,551作品の応募がありました。昨年も1300人を超える応募があり、徐々に多くの若者の応募、しかも多方面での建設産業への想いが描かれており、また、こちらの方でも女子の応募が増え、約22%となりました。応募してく

ださった1,551人の若者の勇気をたたえ、また敬意と謝意を表します。

今年国土交通大臣賞に輝いた方は2人いらっしゃいます。

まずは小泉颯葵さん。小泉さんの作文は『笑顔のために』。建設産業の魅力、果たすべき役割、貢献、課題、面白さは他の応募者と同様に書かれているが、この作者の新鮮さはアジア諸国のインフラ整備等の問題に意識を持っている点にある。社会人でもさほどの国際感覚を身に付けていないところだが、この視点は重要なことと思われる。産業界だけではなく、教育／研究の世界においても、日本の国際化がより強く望まれる現在、このような広い視野を持つ若者の成長が大いに期待されるところでもある。

2人目の大臣賞は山岡愛さん。山岡さんは『空間を創る』と題して、建築家・安藤忠雄の設計による建築物との出会いから、その建築物の素晴らしさを発見し、自然と融合する建築物と人間との関わりを学んだ姿が描かれている。また、それらの作品を見る目、そしてその建築家の書いた書籍を読破する中から、建築の世界に身を置く方法がいかに広いものかを知る。「自分の夢を叶える方法は一つではなく、自分次第でいくつにでもなるのだな」、この悟りが本物になることを期待したい。

不動産・建設経済局長賞には次の3人が選ばれました。

松野谷湧星さんは、『地球を造る仕事』。第一声で「建設産業の魅力、それは、“地球を造っている”ことだと思う」という。率直に建設業で仕事をするのが好きであることを純粋で素朴に力強く書いている。作文というよりも、積極的な意見をストレートに訴える力が感じられ、他の作品にはない魅力がある。彼の成長を見守ってみたい。

島津愛花さんは、『建設業が与える力』。九州新幹線西九州ルートの新設工事は完成間近—なぜこんなにも人々の心に希望／勇気を持たせられるのか。建築・建てる条件が同じでも設計者によってなぜこんなにも異なるものになるのか。建設行為の様々な視点、そしてそれらを一丸となってまとめること。これらが建設業の魅力であり、人々に希望や勇気を与える源泉だとする。

宮口真輝さんは、『建設業が変えてくれた私の未来』と題して、中学生時代の挫折を乗り越えて定時制高校に入学し、その中で経験した外構工事／各種実務とそれによって得られた達成感、実務実習での出会いを通じて自身の夢を見つけた喜びなどを生き生きと書いている。そして「昔の私とは違う、みんなから頼られ、信頼される人間になりたい」。この先の活躍する宮口君を見てみたい。

「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」の応募作品を読みながら、いつも感じるのですが、2つの部門とも、実際に経験したこと、観察したこと、家族・同僚・友達と話したこと、さらに将来への期待などが丁寧にかつわかり易く書かれています。それが契機となって建設産業で働くことになったという事例が多いことも納得です。すべてを公開して読んでいただくのいいのではないかの印象を持っています。

昨年も次のことを申しましたが、昨年にも増して、日本の建設産業の近未来の市場は相当な変革が求められます。伝統的なこと、技術的な継続性を大事にすることはいうまでもないのですが、その一方で、思い切った改善、革新等の活動も重要です。このような状況の下、素直に自分が感じたこと・考えたことが書けること、悩ましいこと・問題だと思うことを文字で伝えられること、このことがいかに大切かを「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」を読みながら確信しました。これからも大いに文章を書きましょう。そして他者に伝えましょう。それらが建設産業の改善、働きがいのある産業へとつながることを期待したいと思います。



写真撮影：衣笠 名津美

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和3年度

未来を創造する建設産業

「私たちの主張」作文コンクール

■趣 旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設産業で働く方々の熱い想いを伝えていただくとともに、一般の方々に建設産業についての理解を深め、関心を高めていただくために作文コンクール「私たちの主張」を実施しています。

今コンクールは、平成20年度から実施し、今年度で14回目となりました。

■募集概要

- 応募資格 建設業の仕事に従事している方
- 応募期間 令和3年5月6日(木)～6月30日(水)
- 応募テーマ 建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。
建設産業に望む未来 又は 建設キャリアアップシステムへの期待
- 応募総数 397作品

■作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

<https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html>

■選考委員

- 古 阪 秀 三 立命館大学 OIC総合研究機構 グローバルMOT研究センター 客員教授
建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
- 西 山 茂 樹 国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課長
- 沖本俊太郎 国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課 建設キャリアアップシステム推進室長
- 高 森 洋 志 (一社)全国建設業協会 業務執行理事
- 樋 脇 毅 (公社)全国鉄筋工事業協会 理事
- 奥 地 正 敏 (一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事
- 勝 瑞 智 章 (一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 人材育成支援担当 総括部長



国土交通大臣賞

建設キャリアアップシステムが 照らす建設産業の未来

こばやし ともゆき

小林 朝幸 [橋本電気工事株式会社]



建設現場に行くと、実に様々な人びとに出会います。十代のころから職人として技を磨いてきた人、まったくの異業種から転職してきた人、外国から夢を求めてやってきた人などなど、実に個性豊かです。かくいう私も30代も後半、40に差し掛かろうかという年齢でこの業界に飛び込んできた身です。それまでの仕事内容とのギャップ、建設産業という特殊な業種に対する戸惑いなど、驚きと苦勞が絶えなかったことを記憶しています。そこからすでに5～6年は経ったでしょうか。この業種、業界についていつも感じていたことがありました。それは「職人さんは自身の経験、技量に見合うだけの賃金を稼げているのだろうか」と言うことです。冒頭に記したように、建設現場には様々な人がいて、様々な経歴を持っています。30年以上職人一筋でやってきた人間と、始めて2～3年という人間がひとくりに「一人工」と表現されて良いのでしょうか。もちろん「会社」に所属していれば、社内の評価では差がついてしかるべきです。しかし、転職を考えた時、独立を考えた時、誰が果たしてその人の技術や経験を公平な目で評価してくれるのでしょうか。また「独立できる年齢に到達するころには、体力的な問題で若いころのような仕事量がこなせない」といった声も現場でチラホラ聞こえます。体力は落ちて、その人の持つ技術や経験は若い頃以上に評価されるべきではないのでしょうか。他の業種を見渡せば、経験を重ね、技術を磨いた世代(50代から60代)は目に見えた形で賃金が上昇しています。しかし、体力的な衰えが仕事量に直結する建設産業においては年齢を重ねることが決して良いことだとは捉えられておりません。これから建設業に飛び込もうと考える若い世代が、体力の減退とともに仕事量、賃金が減る諸先輩方を目の当たりにし、何を夢見て仕事に取り組めばよいのでしょうか。当社においても若い世代の入社希望者は多いとは言えません。人手不足が叫ばれるこの業界に疑問を抱かずにはおられませんでした。

しかし、そんな現状に光を当ててくれるのが「建設キャリアアップシステム」だと私は考えております。技能者個人に紐づいたキャリアアップカードは、例え転職をしたとしても、独立をしたとしても、持っている技能者の財産として残ります。カードに登録された「資格者証」はその技能者の「技術」を証明してくれますし、入場時のカードタッチは「現場入場日数」として管理され、その技能者の「経験」として数値化されます。技術と経験が形や数値となって残れば、それはその技能者の能力の客観的な評価材料となります。能力評価の材料が明確化されれば、評価する側も技能者に対する的確な判断が可能となります。これまで漠然とした評価しかされてこなかったものが、その技能者を助ける大きな財産となるわけです。適正な評価とそれに伴う賃金の向上は、建設産業そのものの評価の向上にも繋がり、そこを目指す若い世代も増加するのではないのでしょうか。このシステムの確立は、今の熟練技能者の評価の向上はもちろん、今後建設産業で働きたいと考えている若年層の技能者の増加を促し、人手不足の解決にも繋がります。

おそらくこれまでも技能者は「技術」と「経験」でその評価を得てきたはずですが、しかし、今まではその評価の基準があまりにも曖昧で、判断する側によって変わる為、結果的に不足している評価を仕事量によって補うことしか方法がありませんでした。その曖昧さ、流動的な評価があるいは「体力的な衰えによる仕事量の減少、それに伴う賃金の減少、若い世代の現場離れ、そして人手不足」という悪循環を作り出していたのかもしれない。「建設キャリアアップシステム」はこれまでの常識を覆した画期的なシステムです。建設業退職金共済との連携も図られ、そのシステムの充実は見張るものがあります。これまで建設産業に貢献してくれた諸先輩方、これからの未来を担う若い世代たちのためにも、当社でもより一層の普及を目指したいと思ひます。





国土交通大臣賞

私の未来施工計画

つちだ りさ
土田 里沙 [川瀬工業株式会社]



十年前の就職活動の際、私の選択肢に建設業は入って
いなかった。私はアパレル関係の会社で7年間働き、結
婚と出産を経て、これから先の自分の人生を考えた時に
立ち止まった。アパレルの仕事でも、やりがいを見出し昇
格試験にも合格をし、将来設計は出来ていると思っていた。
しかし、祖父の代から続く家業の建設業に、幼い頃
から憧れがあり、祖父や父の姿に誇りを持ち尊敬をして
いる気持ちを私の人生に生かして働きたいと思い始めた。
この思いに辿り着くまで長い時間がかかった。

幼い頃から心の中で「女の私には立ち入れない世界」と
勝手に思い込んでいた経緯があったからだ。立ち止まっ
た時に、今の建設業を見渡すと、女性がダンプの運転を
している姿が目に入ってきた。頭の中に張り付いていた私
の固定観念が消えた瞬間だった。父に会社で働かせて欲
しいとお願いをし、胸に秘めていた憧れの業界で働き始
めた。

平時は総合職として、冬は除雪のオペレーターが私の
仕事になった。オートマの解除から始まり、マニュアルを
運転できるように自動車学校に通い、中型免許、大型特
殊自動車の免許を取り、車両系建設機械の資格を取った。
除雪の仕事は昼夜関係なく出勤になり、旦那に寝ている
子供をお願いし、また積雪予報のある時は大好きなお酒
を飲めない。除雪に出ると、今か今かと待っていてくれ
る人々がいる。来るのが遅いと言わんばかりに仁王立ち
をして待っている人、ありがとうと言いながら手を合わせ
てくれる人。建設業に従事して気付いた事は、モノ造り
には人を惹きつける魅力がある。またモノ造りの喜びの中
には、人に見せる力があると言う事が分かった。見てくれ
る人が喜んでくれる、驚いてくれる、褒めてくれる事が嬉
しい。建設業には造る喜び以外にも、見てもらって喜ん
でもらう喜びや、「どうだ!」「凄いでしょ!」と言いたくな
るような誇らしい喜びなど沢山の魅力に出会えた。この
魅力を若い世代に伝えて、建設業の面白さと楽しさを知
ってほしい、自分と自分以外の人に誇れる仕事に就いてほ
しいと思うようになった。

時期を同じくして、大手ゼネコンの協力会社として工業
系高校を対象とした、現場見学会や、職人技体験会、先
生方との意見交換会に参加する機会に恵まれた。その中
で学生さんや保護者の方が建設業に抱いているイメージ
があまり良くないと言う現実を改めて認識した。良くない

イメージとして、過半数以上の方から、休みが少ない、仕
事がきつそうと言う意見を貰った。その時、今は100パー
セント違うと言えない現実があるけれども、近い未来に変
化をもたらせる建設業であってほしいと強く思った。

そして、現在6歳と4歳の私の息子が、将来もし建設業
に入職した時は、新たな土台の下で今よりも良き、恵みの
ある建設業で地を踏んでいてほしい。

私は、未来の建設業と今の建設業を繋げる為の工事を
受注できたような気持ちで、工期に間に合わせるべく、今
従事している者として未来の建設業を確かなモノとして竣
工させたい。

未来建設業の施工計画には、AI技術の躍進と普及を
追い風としたい。4週8休の実現には、土日、祝日は人
間に代わってAIがモノ造りしてくれる事が有効な手段
と考える。だからと言って、その為にAIにプログラムを
組み込むような労力は必要としない。日頃から作業に同
行させる手段として、職人のヘルメットに小型の軽量カメ
ラを搭載する。一日の業務を終えると、充電も兼ねて自
動マニュアル化装置にセットする。翌日の業務開始時に
は、マニュアル化が完了している構図だ。これにより、4
週8休の実現だけではなく、コロナ渦のように、誰も想像
できない未曾有の事柄が起きた時に、柔軟に対応する事
が可能となる。会社で感染者が出てしまった場合、現場
が全体になる可能性も出てくる。そんな時に、工期の遅
延、労務費の加算と負の要素を負わずに済むにはAIを
即戦力として迎え入れる事が出来たら戦々恐々の今から
少しでも脱却できる道になるのではと考えると未来は明る
い。また、パイプレーター等の体に負担のかかる作業を
AIが担ってくれる未来も望みたい。建設業において、就
労者の高齢化と若年層の定着率の低さは喫緊の課題で
ある。今、従事している年配の職人さん方に少しでも体
を労われる為に。また、若い職人さんが身体の不調や、や
っぱり建設業はキツイと思わずに働き続けれる為に。今ま
で無かった物や事を無いで終わらせずに、「ない」を「あ
る」に変えるチャレンジに挑戦し続ける事が、何も無かつ
た所に大きな構造物を造り上げる建設業の神髄であって
ほしい。

最後に、自分にとって大切な人、自分以外の誰かにとっ
て大切な人、何人もの人と竣工という一つのゴールを目指
して他にはない素晴らしさを感じ続けたい。



不動産・建設経済局長賞 成功物語



いまなか まさのり
今中 将雅 [電通設備株式会社]

「去年とおなじ額でええやろ」

その言葉は、もう聞き飽きた。

私は、電気工事をメインでやっている会社に勤めている。
しかも、下請けで飯を食っている会社だ。

元請けさんから仕事を依頼されるとき、最初に出てくる
言葉が、去年と同じ額でええやろだ。そんなわけないやろ！
去年は、あんたから懇願されて、人のいない中、必死で工
事を仕上げたのに……。

施主さんから、工期限内に工事も終わり、仕上がり具合も
いい。おまけに事故もなかったと評価を受けて、あんたも
超ご満悦だったよね。あの評価はどこへ消えたんだ。

唖然とするが、口には出せない。下請けなんてそんなも
んだとあきらめて来たからだ。景気のいい時は、忙しいか
ら、ちやほやされる。でも景気が悪くなれば、うちの会社
なんて誰も助けてくれない。普段から元請けさんへのご
機嫌をうかがい、いい子ぶっていることが、生き残ってい
く最善の方法なのだ。昔からそう教えられてきた。

一度、小さい会社に入ってしまったら、もう給料の高い
一流の技術者になるのは不可能なんだろうか？若い時に
もうちょっと勉強して、いい学校に入っておけば良かった。
つくづく後悔するときがある。

昔は、工事だけやってりゃ良かった。しかし、今は違う。
工事以外にもCAD図の作成やら多岐にわたる竣工書類、
おまけに電子化納品など、頭がくらくらするほど専門工事
以外のことにスキルが必要となった。

分厚いガイドラインを何度もひっくり返し、目を皿のよう
にして読む特記仕様書、図面は正しく書けてるか、抜けて
る書類はないか、チェックシステムと言う恐ろしいほど間違
いを指摘してくれるシステムと格闘をし、ようやく納品の
CDディスクを完成させる。これをやり遂げるスキルは半端
じゃない。いったいこういう努力は誰が評価してくれるの
か？

あんなの簡単じゃない！何もわかっていない者達が周り
にたくさんいる。怒りでモチベーションの下がる日がある。

それが、ここにきて風向きが変わってきたようだ。

キャリアアップシステムの登場だ。

個人のスキルが統一的に評価される時代が来たのだ。

個人の評価が高くなれば会社自体の点数も高くなる。

会社の評価が高くなれば、仕事の依頼も増える仕組みだ。

逆に見れば、受注を増やすためには、いい人材を育てな
きゃいけなくなる。つまり技術者を大事にしてくれる会社
が登場する仕組みになるのだ。

いわゆるプロ化の始まりなのだろう。才能のあるプロ野
球選手やJリーガーは、大手メジャーから多額の契約金で
引き抜かれて、有名選手になっていく。ホームランバッター
も剛速球投手もテレビによく出るから人気が出る。個人の
能力が見える化できれば、能力のある技能者が業界で良
く知られるようになり、いろんなところから声もかかるよう
になるだろう。結果、あいつがいるなら大丈夫と会社の受
注も増えていく。売り上げが伸び、個人の給料も高くなっ
ていく。それが個人のモチベーションを高めてくれる。そ
してさらに努力を続けると、やがてプロにトレードがあるよ
うに、大手から引き抜きが来るようになる。今の時代に即
したプロ選手の成功シナリオだ。その成功事例が見えた
時、建設産業に人気が出てくる可能性がある。

私はこのシステムに大賛成だ。

小さな町の電気工事会社で地元の学校を卒業して、あ
んちゃんが就職する。周りの先輩方に手とり足取り教えて
もらいながら電気工事士の資格を取り、現場を経験してい
く。十年がたつ頃、彼は、会社でなくてはならない存在に
なっていた。そんなある日、大手から、うちに来ないかと
引き抜きのオファーが届く。給料は、破格の好条件。世
話になった町の電気工事会社に残るべきか、外の世界を
知るべきか彼は悩む。しかし、町の工事会社の社長は行っ
て来い！と彼の背中を押してくれたのだ。引き抜かれるの
はつらい。でも彼の将来を考えれば、送り出すことは仕方
のないことだと社長は考えたのだった。

更に十年がたち、彼は大手の幹部になっていた。

世話になった町の工事会社には、彼のはからいで工事
が発注されるようになっていた。

こんな話を耳にするようになればいい。

全部が丸く収まる制度なんてない。いいことも悪いこと
もある。今、人が足りない建設産業に明かりを灯すとすれ
ば、成功が見えることが一番大事なんだと思うのである。



不動産・建設経済局長賞

妻とともに目指す現場監督



つだ あきら
津田 旭 [株式会社丸本組]

朝6時に起床。カーテンを開けて晴れの日「今日も一日現場日和」と仕事やる気モード、曇りの日は「頼むぞ一日天気よ持ってくれ」とお天道様に願掛け、雨の日は「大雨は勘弁してほしい。現場は異常無いかな」といつもより心配モードで10分早めの出勤。

こんな毎日がルーティンとなった私も今年で35歳になりました。工業高校を卒業し建設業の世界に飛び込み、元請の現場監督として達成感、使命感等色々な想いを重ねて早17年が経過しました。言葉で17年と言うとあっという間ですが今思い返してみると朝から晩まで掛矢を振り回して手に豆が出来たこと、走り回って汗をかき作業服やヘルメットの顎紐がよく汚れたこと、強風の中、黒板チョーク片手に現場で写真撮影したこと、初めて現場代理人を任せられた時は気合いが入りすぎて空回りしたこと等書き切れない程の出来事がありました。

私は元請を主とする会社に入社し、世間一般に言われる「監督さん」の業務を行っているわけですがやはり職業柄、何事にも先頭に立ち他の見本となる行動を取り、頼られる存在になるよう心掛けております。そのおかげで、私が新入社員だった頃から一緒に仕事をしてきた作業員さんからも「今では立派な監督になったな。昔は何聞いてもおどおどしてたくせに。」なんて昔話を笑いながらできるようになりました。

しかし、私も仕事を終え自宅に戻るともう一人の「監督さん(妻)」に指導される毎日であります。「物を使ったら同じ場所にきちんと戻してね。」「家族で決めたルールは守ってね」等々、何故か私が職場で後輩や作業員さんに対して指導していることと同じようなことを言われている気がしてなりません。

ある日、そんな妻が本当の「監督さん」を目指したいと言いました。元々、嫁の祖父、父ともに建設業に携わっており小さな頃から重機を見る機会があったり、何気ない会話の中で仕事の話を聞かされており、高校も工業高校土木科を専攻するなど興味はあったそうです。二児の母であり慌ただしい毎日を過ごす傍ら、建設現場の事務として働いており身近に現場を感じていたこともあって、施工管理の仕事をしてみたいとのことでした。正直、私

もこの仕事の面白さの反面大変さも理解しているので心配しましたが、無理せず出来る範囲で頑張ってみたらと賛成しました。

現在の妻の仕事ですが、ある時は電卓を叩きながら数字とにらめっこして請求書チェックの事務職を行い、またある時はレベル三脚を肩に担いで法面を上がったり下がったり、測量作業の施工管理職を行ったりとまさにスーパー事務員です。(とは言うもののまだまだ見習いなので先輩から日々、熱い指導を受けているようですが・・・)

やはり妻にとって土木の仕事はおもしろいようで「盛土工張はどのようにかけるの。法面勾配って何。側溝丁張とは違うの。」等、私に質問攻めで聞いてきます。子供が興味のあることについて間髪入れず質問してくるように。

私もその道の先輩でありますから缶ビール片手に得意気に説明します。頭を前屈みにしてテーブルに向かいノートにメモをする妻の好奇心や向上心に圧倒されながら、その考え方や行動力は私自身を初心に戻しフレッシュマンにしてくれる有り難い存在です。目標であった二級土木施工管理技士の資格を取得したため次は「一級」と決めているそうなので監督の先輩として私が一番に応援してあげたいと思います。

最後に、妻の行動から若者はもちろん女性技術者の力が今後の建設業界にとって必要であると再認識したことで最近実践していることがあります。それはブレインストーミングです。ブレインストーミングとは様々な観点から自由な意見を出し合い、決して否定することなく数多く出された意見を総合的に判断する手法であります。私自身、ある程度の経験を踏まえて物事を判断する反面、経験からくる一辺倒な考え方に固執してしまう時があります。そんな中、若手から出された意見が意外な観点からの確に物事を捉えている時があり、これがこの手法の最大の利点であります。

これからの建設現場は、豊かな発想に満ち溢れている若者や小さなことにも気が回る女性が活躍できる場所だと私は考えています。数年後、妻が本当の「監督さん」になれるよう私も一緒に走り続けます。



不動産・建設経済局長賞

母の背中と私たちの未来

きむら ゆりか
木村 友梨香 [株式会社新潟藤田組]



私は、母が嫌いだった。建築関係の仕事に就きたいと思ったのは、小学生の時。

建設業を経営している母を見て育った私は、尊敬しつつも、いつも仕事で忙しく相手をしてくれない母のことが好きになれなかった。

小学校の帰り、母が運転する車の後部座席でぼーっと外を眺めていると「ここはお母さんが設計した建物だよ。」と苦労話も交えつつ私に話してきた。正直、建築という存在に母を取られていた気分の私は、素直に「すごいね!」と言えなかった。だが、その頃から母に振り向いて欲しいという気持ちから、建築というものに興味を持ち始めていた。

母の側に居ることができる仕事場は私のお気に入りの場所で、働く母の姿を見ながら学校の宿題をし、仕事が終わるのを待つ、それが私のルーティーンだった。休日、祝日関係なく夜遅くまで書類や図面の山に必死に向き合い、その合間を縫って家事をこなす。

そんなある日、過労で倒れた母の姿を見て建設業の大変さを知った。母は経営者ということもあったが、家庭と仕事の両立を考えると女性が建設業で活躍できるのか、幼いながらに不安に思ったのを覚えている。「どうにか母を楽にさせてあげたい。」そこから真剣に建築と向き合おうと決心し、私の建築人生は始まった。

私は大学で建築分野を学び、今の会社に入社して2年目になる。建物を身近に触れ理解を深めたいという気持ちから、施工管理を行っている。

まず初めに、前述を踏まえた上で私には目標がある。「建設業のイメージを変え女性が働きやすい環境を作る」ことだ。

以前よりは働き方が改善されてきているとのことだが、特に施工管理は「きつい」「汚い」「危険」の3K職場と言われており、建設業界へのマイナスイメージが人手不足を進行させている。更に、女性は男性に比べて体力もなく、又、結婚し家庭を持ったら時間にも制限されたりとハンデキャップがある。女性が距離を置くのも無理はない。

私は、現場作業を行うにあたって男性が簡単にできることが私には難しい現実无力さを感じるがあった。現

場に出ることが恥ずかしくて、悔しくて隠れて泣きながら作業していたこともあった。そんな時、尊敬している上司の方から、「できないものはできない。できる人がやればいい。女性は男性が気付けない細かな気配りができるでしょ?お互い様だよ。」とアドバイスを下さり、背中を押され少し気持ちが楽になった。それと同時に女性がこの業界に必要とされていると実感でき嬉しくなった。

決して楽な仕事ではないけれど、私はこの仕事が好きだ。図面で見ていたものが立体的に立ち上がる喜び、何事にも臨機応変に対応できる先輩や職人さんのカッコよさ、それを身近に感じながら仕事ができる幸せ。覚えることが多い分、新しい知識が増え自分の成長を感じられる嬉しさ。今は、未熟で出来ないことの多さに心を折られる日々だが、周りに迷惑をかけながら必死に建築と向き合っている。

私は、女性が活躍できる職業であるということを知ってもらい、マイナスなイメージを払拭し建設業の魅力を伝えたい。その為にも、女性、男性お互いが働きやすい環境とはどういうことなのか、考えるだけで終わっていないか、実行に移せているのかを今一度、皆で真剣に見つめ直すべきだと思う。

実際に自身が建設業に携わったことで、改善してほしい点は多々見えてきているが、正直言いづらいことも沢山ある。だが、私たち女性は黙って我慢しているだけでいいのだろうか。思っているだけでは伝わらない、受け身の姿勢ではなく理解してもらおう努力が必要だ。私ひとりでは変えられない。だから、お互い手を取り合って笑顔で働ける建設業界の未来を皆で作れたらと考える。

母に振り向いて欲しくて、母を救いたくて始めた建築も今では、どんなに辛いことがあったとしても嫌いになれないくらい夢中で仕方ない。いつか母を超えることが私の夢。

そして、私が母になった時、自分の子どもにこう言いたい。「母として、技術者としてどちらの姿も好きだ。」と。



優秀賞

建設業をまもるために

さとう なつき
佐藤 夏輝 [株式会社橋本店]

「昨日、県内の工事現場で死亡事故が発生しました。」以前の私ならあまり気にも留めていなかったニュースでした。建設業で働きはじめてから今年で3年。テレビからこんな言葉が聞こえるとハッとしてテレビ画面に釘付けにならずにはいられません。建設業というかつては3Kなどと揶揄され労働環境は決して良いといえるものではなかったと聞きますが年々安全への意識も更新され以前よりはずっと労働環境も改善されています。しかし残念なことに他業種と比べるとまだまだ事故や労働災害が多く危険というイメージが先行される業界であることは事実です。実際に施工管理という仕事をしてみて、まだたったの2年間ですが安全な現場をつくることの難しさを日々感じています。現場には、建物をつくるうえで欠かせない存在であり、建設業の最前線で活躍している作業員さんたちがいます。正直初めは、なんだか怖そうだな、無口で話しかけづらいな、なんて感じることも少なくありません。しかし実際に働いてみると私が現場での作業に苦勞している時自分の手を止めて大丈夫?手伝うよ!と助けてくれる人、現場の進行に悩んでいるとアドバイスをくれて、俺たちがなんとかするよ、元氣出せ、大丈夫!と背中を押してくれる人、優しくものづくりに熱心な人たちがたくさんいます。そんな作業員さんたちと働いているうちにこの人たちを危険な場所で働かせるわけにはいかない。今日も安全に、大切な家族の元へ帰ってもらわなければ、と強く思うようになりました。工事現場で起こる事故の原因は、安全帯をしていなかったとか、基本のルールを守っていなかったとか、ほんの些細なことがきっかけになっていることが多くあります。実際に現場でもそんな場面をみることも少なからずあります。自分よりも年上でプロである人たちに注意をする、ということは少し勇氣がいることでもあります。そんな時私は入社したての頃安全部長に言われた「馴れあってはいけないよ、口うるさいといわれても安全に優先されることはないのだから」という言葉を思い出します。現場の指揮をとる私たちが安全に対して一番真摯でなければならない、これが私のモットーです。また、女性という立場で現場を歩いてみる

とほとんどの人が気にせず通る段差がすこし乗り越えづらい、といった気づきもあります。そういった個人の気づきや視点を現場で共有し、女性技術者の参画・労働人口の高齢化が進む建設業において誰もが安全に、作業しやすい職場づくりを先導する技術者になることが今の目標です。日々更新されていく技術や建機と共に建設業の労働環境・安全に対する意識も刷新していくことで建設業の未来はさらに明るいものになるのではないかと感じます。

また、近年建設業における大きな課題が“働き方”であると感じます。法改正に先駆け建設業でも週休2日制の確立や労働時間の削減への取り組みが活発に行われていますが他業界に比べるとまだまだ発展の余地が大きいのが現状です。女性という立場からみても家庭や育児との両立を考えると、この先どのくらいの間建設業で働き続けることができるだろうかと不安を感じることも少なくありません。現場で働くものだけでなく、発注や企画、監理を含めた建設業全体としての働き方に関する大きな意識の更新と柔軟性が必要だと感じます。昨今のコロナウイルスをきっかけにリモート・テレワークという体制も働き方の選択肢として主流になっています。建設業においても現場での作業を分担すれば育児や介護をしながらの自宅での業務も可能ではないでしょうか。他にもフレックス制など勤務体制の多様化の推進や企業内保育所などの整備、復職サポートについて業界全体が積極的に取り組むことでさらに多くの人が建設業に携わっていけるようになると思います。

建設業に飛び込んで3年、大変なこともたくさんありますが、建物が完成したときの感動は何にも代えがたいやりのがいです。私自身夢ある建設業とできるだけ長く歩んでいきたいと思っています。街をつくり、人々の生活を守るそんな魅力ある建設業が安全で老若男女多くのひとが長く活躍できる場であるために技術だけでなく労働環境・働き方という点でも明るい発展を遂げることを望みます。夢、かぎりなく。



優秀賞

女性の働き方

おしま りら
大島 璃来 [伊藤工業株式会社]

建物を建設するにあたって素晴らしいものを作ろう、喜んでもらいたいという気持ちに男女の差はないと思います。ですが、職人さんや周りの人達からよく言われることは「珍しいね」、「なんでこの仕事を選んだの」、「大丈夫?」など、女性がこの仕事をするのが不安、心配とでもいうような言葉の数々です。入社したばかりでまだ仕事の内容が分からないことだらけの私からすると一種の差別のような言葉に聞こえてしまいます。実際に世間や昔からのイメージとして建設業は男の仕事、きつい・汚い・危険、いわゆる「3K」という言葉が思い浮かび、普通の「女性」という言葉からはかけ離れているのかもしれませんが。このように言う人がいても決して悪気があるわけではないことも分かっています。ただ、それを言われて、自分は普通ではないのか、女だから信頼してもらえないのではないかと、などと考えてしまう人も少なからずいるのではないかと考えてしまうのです。建設業における女性の入職促進、就労継続というのは長年の課題で、時間はかかると思いますが、少しずつでも建設業で働く女性に対しての周囲のイメージを変え、女性が働きやすい環境を整えていくことに少しでも役に立てればと考えています。

私が建築に興味を持ったきっかけは、小学生の頃、自分の家を建ててもらっていた現場で男性に交じって女性が仕事をしていて、働いている姿が輝いていてカッコいいなと思ったことです。単純な理由ですが将来を悩んでいた私にとってはとても大きな一歩でした。高校は工業高校の建築科に入り建築の世界について学びました。この仕事に就いて感じたことはやはり建設業には女性が少ないのだなということです。私が就職した会社の部署には女性が5人のみ、そして、まだ初めての現場ですがたくさんの職種の職人さんの中で出会った女性は1人のみです。その方はまだ若く細身で、私の中の建設業で働く人のイメージと異なっていたので、正直少し心配だったのと女性の職人さんの働き方が知りたくてつい目で追っていました。そして、その方の材料を持って足場を駆け上っていく姿や、バールを使って豪快に笠木をはがしていく姿、男の職人さんと話して楽しそうに笑っている姿を見て、思っていた以

上に男と女の差なんか感じさせない、私が小学生の頃憧れていた姿と重なりました。私もその女性の職人さんみたいにやりがいをもって楽しくこの仕事を続けたいと思いました。

そのための秘訣として、最初にするのは職人さんとよく会話することだと一人の職人さんに教えてもらいました。職人さんは男性の方がほとんどで歳が一回りも二回りも離れている方のほうが多いです。人生の先輩として、経験値の点で、現場の声を聞いて学んだほうがよく覚えられそうです。最初は名称が分からない部材や、秋田特有の訛りなどで何度も聞き返してしまうことや強く言われてしまったこともありましたが、職人さんはイメージとして話づらい印象がありましたが、挨拶やたくさん話を聞くことで以前よりしっかりと内容を理解できるようになり、また、たわいもない会話で笑いかけられるようになりました。職人さんたちは私が思っていた以上に気さくで優しい方ばかりだと気づくことができました。知らないことだらけの自分はただ会話をするだけでも職人さんの話全てが勉強になります。まだまだ勉強不足なのだと、学ばなければならないことが山ほどあると強く感じました。一つの現場でできるだけ多くの職人さんと話をし、日々勉強をしつつ、次に同じ現場で一緒に仕事をさせていただく機会があるのであれば、自分の成長を見て笑顔になってもらえるように頑張りたいと思います。今私が携わっている初めてのこの現場が私のスタート地点として始まります。一生忘れることはないと思っています。

職人さんたちと話をしていて、男性みたいに力はないけれど知識や建物に対する思いは負けない、負けてはならないと強く思いました。「3K」のように辛いだけじゃない建築の魅力に気づいてくれる人が増えたらいいなと思います。より多くの人たちに建築に興味を持ってもらい、女性も活躍できる職場だということを知ってもらうことで世界は変わると思います。女性が働きやすい、働き続けることができる、そんな未来が訪れることを建設業界の一員として願っています。



優秀賞

グローバルな人材育成

どー てい く い ん ほ あ
Do Thi Quynh Hoa [株式会社小野工業所]

私はベトナムの北部の海沿いの町に生まれ育ちました。中学生の頃、実家の近くにバイチャイ橋(斜張橋・長さ:1106m)が3年間にわたって日本のODAにより建設されました。海に囲まれている小さな町だった私の故郷はこの橋ができたことで、それまでの生活が一変し、とても感謝しました。当時、私は土木に関して何もわからなかったのですが、海の真ん中に水面から約150mの高さの橋が少しずつ成長することが毎日実感出来て、構造物作りの仕事に興味を持ちました。また、今まで印象がなかった土木技術者はこうやって異国でも、言葉の壁があっても、コミュニケーションをとって、マネジメントできる姿勢に憧れ、将来は自分も技術者になって、世界中のどこでも、人の生活を支える公共構造物を作りたいと思い、高校を卒業した後に、日本で土木の施工管理を学ぶことを決心しました。当時、留学先の岩手県に行くタイミングで東日本大震災が発生しました。震災の1ヶ月後、復興が始まった時期に日本にやっと来ることができました。2年間は日本語を勉強し、その後4年間大学で、専門土木を学びながら、東日本大震災復興にかかわったボランティア活動や復興現場のインターンシップに参加したおかげで「作り続けることだけではなく、維持・修繕することとても大切」だと感じ、大学を出た後に、維持修繕が中心の現在の建設会社に就職し、土木施工管理者として働いています。

初めて建設業に入っの現場では、大学で学んだことだけではなく、ゼロから学ぶことがほとんどでした。また、日本で働く外国人の私は他の同期の日本人より何倍も努力しなければならないと覚悟していました。日々の施工打合せを理解できるように、土木専門の用語を覚えたり、図面の読み方を勉強したり、無事故無災害で現場を運営するために自分なりに色々工夫し管理することは新鮮な経験が潤沢でした。そして、当社現場での唯一の女性技術者として、周りとうどうコミュニケーションをとるかも自分の中では一番の課題でした。朝礼・昼礼で大人数の前で話すことで毎回緊張し、前日に眠れなかったことは今も覚えています。この4年間、ドキドキしながら、色々な新しい経験、課題をクリアして、2級土木施工管理技士、上位資格の1級土木施工管理技士を取得し、現場代理人

として勤め、原価管理、工程管理等土木全般の施工管理の経験を積んでいます。有資格者となった現在、私と同じ経験の外国人の技術者や実習生等が頑張っている。現在、日本が直面している「人口減少」は全産業の人手不足に直結します。このまま、時代が変わり、多くのAI新技術が発展しても、マネジメントする技術者が足りなくなります。これから、建設産業が望む未来は「人手不足を補うための外国人技術者・技能者を育成すること」ではないかと考えます。

外国人技術者・技能者を育成するための、一番の課題は日本語能力です。最終の目的としては公的な資格を持ち、一人前として、自立し生計を立てることでありますが、現実では、勉強の環境と勉強の方法によって、最終目的到達までは個人の差が大変あります。多くの建設会社ではまだ週休二日制度が完全実施されておらず、労働時間がほとんどで、スキルアップや日本語の語学学習時間がなかったため、日本に来て2年以上が経っても、日本語能力試験3級を持っていない実習生が少なくないのが現実です。日本語が理解できないため、労災事故を起こした外国人の事例もあります。外国人技術者・技能者を育成するには、スキルアップの勉強や日本語の勉強機会を増やす必要があります。安全、品質等の基本的な施工管理能力向上のためには日本語力に対する基本はより厳しくし育成する必要があるのではないかと考えます。

「やればできる」という言葉はよく教わっています。ベトナムの橋を作った日本人の技術者と、今日本で働いている私たちはまさにその一つの例です。もちろん誰でもやればすぐ結果が出るわけではないですが、挑戦して、あきらめず、やり方を変えたり続ける努力が大切だと思います。平成から令和に代わっての3年目、新型コロナウイルス拡大の影響で「人口減少」が加速し、建設産業も新たに果敢な動きが必要です。未来を担う人材を確保するための「グローバル化」、今までと違う形の人材育成が望まれています。性別や国籍等の概念を捨てて、みんなと一緒にいいものを作って、維持可能な社会形成が必須であると考えています。



優秀賞

好きなことを仕事に

いけやみのり
池谷 実莉 [株式会社中村建設]

私は今、自分の「好き」を見つけた。

「今日も一日安全作業で頑張ろう。ご安全に」毎朝、作業員を集め朝礼を行い、この言葉と共に現場が動き出す。これが私の一日の始まりだ。

入社して四年。暑い夏を超え、手がかじかむ寒い日も私はこの仕事と向き合った。現場で女性はまだ一人。また現場の頭である代理人が一番年下と、いさかどちらもやりにくさを感じつつも、皆、親のような温かい目で見守ってくれている。

「女性なのに大変じゃない?」

この仕事を通して何回と聞かれたことであろうか。男性のイメージが強い建設業界に女性がいることにまだ珍しさを感じているのだ。ただ、3K(きつい・汚い・危険)だった時代から今は(給料・休日・希望)の新3Kへと変化している。週休二日制が推進され、育休・産休が取りやすくなった今は、男性社会のイメージが強い建設業界に、女性の顔が増えつつある。

時代と共に変化していくこの世界。入社当時は“女性だから”と言われまいに必死に食らいついた。会社に女性技術者がいないこともあり、悩みを誰に相談したらいいのか分からず、とても苦勞したのを思い出す。

しかし、今は女性目線で仕事を行い、働きやすい環境が整えられている。その陰には、建設現場で働く女性の集まり、通称「けんせつ小町甲斐」の力が私を後押ししてくれている。これからの若手の担い手確保のためのPR活動等のほか、女性が働きやすくなれば、自然と男性も心地よく仕事に専念できるのではないだろうか。といった男性の視点にも着目した意見交換会も行っている。この集まりには、実際に現場で働く女性ほかに、国や県の発注機関の方も参加している。現場での悩みや相談を打ち明けると、先輩方のアドバイスや過去の経験談など、どれも貴重で重みを感じる言葉だらけだ。

今現在、コロナ禍で集まりが減ってきてはいるものの、リモートによるライブ配信を行うなど、今までと同様の活動を行うことは難しいが、活動を継続していく事が大事であ

ることをモットーに手法を模索し行っている。

また皆、LINEなどのSNSで繋がっているのも、会えない時でも気軽に相談に乗ってもらえるような空間があり、私にとってとても心強い。

男性社会に女性が飛び込んできている時代に、「女だからできない」というのは単なる甘えである。やりたいと思ったことをやり遂げることは大きな進歩となる。現場の進捗と共に自分自身も成長し、自分にできる努力は惜しまず、何事にも積極的に望みたい。

そして、より多くの人に女性が働く姿を見て、興味や憧れを持ってもらいたい。昔と違い今は、女性も十分働ける時代である。私たちの世代が、土木の世界で女性も普通に働き続けられる多様なモデルを示すことができれば、この未来はより明るくなるのではないだろうか。男性も女性も含めて、みんながより働きやすい業界になってほしい。触れてみたら、きっと抜けられない魅力があるはずだ。機会を逃したら、次のチャンスがいつあるか分からない。悩むよりも行動だ。この業界に不可能はなし。やりたいことは何でもやってみる、毎日が挑戦の連続だ。

一口に建設業と言っても、仕事内容、携わる人の目標は様々。この仕事は経験工学だ。前よりもうまくできたと言うことは、自分が成長している証拠だと思う。そうすると、もっと頑張りたい!とさらにやる気が起きる。この仕事は、地図や形に残る仕事、自分の作ったものがたくさんの人役に立てる誇りある仕事であり、つくることの楽しさ・完成した嬉しさは実際に携わらなければ味わえない魅力がある。人々の生活に密着し、社会インフラを支える重要でやりがいのある仕事だ。

好きな事を仕事にし、楽しく仕事に励んでいる毎日は、まさに私にとって天職といえるのではないか。自分で考え行動し、たとえそこで壁にぶつかったとしても、私の周りには頼れる先輩方がいる。「好き」という気持ちがあれば、乗り越えられる。

だからわたしはこの仕事が好きなんだ。



優秀賞

もう一度、ここに。

かわご 河合 あゆみ [小林建設株式会社]

年齢、31歳。性別、女。

私が建設業に望む未来は、地域の安心・安全を守り、物づくりの魅力を老若男女問わず伝えていくことのできる未来です。そして、建設業が""選ばれる""未来であって欲しいです。

私は文系の大学を卒業後、地元の新潟県にある建設会社に事務員として就職しました。しかし、婚約のため富山県に引っ越すことになり、やむを得ず退職しました。建設業を離れることに未練があったものの、結婚や出産、子育てなどのライフイベントを考えた結果、託児所を併設している福祉施設への転職を決めました。その後結婚、出産し、幼い二人の子育てに奮闘しながら、私は自分の中で「いつかまた建設業に携わりたい」という気持ちが大きくなっていくことに気づきました。幼い子供たちは保育園で風邪などが流行ればすぐに感染し、母である私は看病のために仕事を休ませてもらうことが多々あったので、転職活動をするにあたり「自分は会社にとってリスク」という感覚がありました。そして、建設業界は女性の技術者が増えてきているとはいえ、まだまだ男性が大多数を占める男性中心の業界というイメージも少なからず持っていました。

そんな中、出会ったのが今の会社です。建設会社の事務員をしていたとはいえ、現場の知識はゼロに等しく、子育て中である私を現場管理職の正社員として採用してくれた時、「もう一度、ここ(建設業界)に戻って来ることができるようになって!」と、感謝の気持ちでいっぱいになりました。何より事務の仕事だけではわからなかった現場の実際の姿や空気を自分の目で見て感じるができるのは、感無量です。

工程管理、安全管理、品質管理、原価管理、覚えることが山積みで、まだスタート地点にも立てずにいますが、やってやれないものではない。そもそも建設業界でバリバリ働いている女性もたくさんいるのに、男性がメインというイメージだけで怯んでいた私が間違っていました。段取り8分、いいえ、段取り9分くらいの気持ちで仕事をコントロールできるようになりたいです。工夫次第ででき

る仕事は変わっていくと思います。もっと早くに挑戦すれば良かったと悔やみつ、今は2級土木施工管理技士の資格取得に向けて、勉強に励んでいます。

工務部は私以外全員男性社員ですが、アットホームな雰囲気でもとても居心地が良い職場です。先輩社員と部長のやり取りを聞いているだけでも学びの機会が多く、設計図書からどれだけのことを理解しないといけないのか、協力業者や下請業者の選定に大事なことは何かなどを考えながら過ごしています。自分が一人で現場を担当できるようになった時にどのような仕事がしたいか、「なりたい自分」や「やりたい仕事」を具体的に思い描くようになって、補助的な仕事をしながらでも様々な視点で物事を考え吸収するようになりました。

正直、仕事に対しては貪欲に上を目指したいという思いがあり、自分にとっても会社にとっても発注者や使用者にとっても良い工事ができるように、地道に経験を積み、成果を上げていきたいと思っています。しかしながら、仕事と家庭の両立ができていないのが現状で、子供が熱を出して仕事を休めば会社への罪悪感、子供を義実家などに預けたら子供への罪悪感があり、気持ちが不安定になることが多々ありました。それぞれの家庭の事情にもとても理解のある職場で、こんな会社だからこそ頑張ることができるのかもしれませんが、限られた時間で一番効率の良い方法を探し、無駄のない段取りで仕事を進めていけるよう、これからの課題として向き合っていこうと思います。

私は新潟県と福島県の県境にある過疎地の出身で、小さい頃から道路改良工事や災害復旧工事を目にしていました。今インターネット社会で子供たちの多くが「ユーチューバー」を目指す時代ですが、少し周りを見渡して、地域の安心・安全を守る産業にも目を向けて欲しいと思います。そして、保育や介護などの家庭の事情がある人でも、やる気があるのなら就労先として選び、是非挑戦して欲しいと思います。

MEMO

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和3年度 高校生の作文コンクール

■趣 旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、将来の進路として建設産業を考えている高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒を対象に、建設業への思いや建設業を進路に考えるようになったきっかけなどを広く伝えていただく場として、作文コンクールを実施し入選作品による作品集を多くの方々に届けています。

「高校生の作文コンクール」は平成25年度から実施し、今回で9回目となりました。

■募集概要

- 応募資格 高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒
応募期間 令和3年5月6日(木)～6月30日(水)
応募テーマ 建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。
建設産業でやりたいこと 又は 私が思う建設産業の魅力
応募総数 1551作品

■作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

<https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html>

■選考委員

- 古 阪 秀 三 立命館大学 OIC総合研究機構 グローバルMOT研究センター 客員教授
建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
西 山 茂 樹 国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課長
沖本俊太郎 国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課 建設キャリアアップシステム推進室長
高 森 洋 志 (一社)全国建設業協会 業務執行理事
樋 脇 毅 (公社)全国鉄筋工事業協会 理事
奥 地 正 敏 (一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事
勝 瑞 智 章 (一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 人材育成支援担当 総括部長



国土交通大臣賞 笑顔のために

こいずみ そう き
小泉 颯葵 [山梨県立甲府工業高等学校 土木科 1年]



私が思う建設産業の魅力は、たくさんの人を笑顔にできることだと、私は思います。

私は幼いころに自宅を建て替えたことがあります。その時は、どんな家になるかととても楽しみでした。建設途中に現場を見に行くと「こんな感じで作るんだ」と心が躍り、見ていてとても面白かった記憶が残っています。そして家が完成するとまた感激しました。それまで住んでいた家がなくなってしまうのは少し悲しかったけれど、それ以上に、これからの生活が楽しみでした。現在もこの家に帰ると幸せを感じるし、家族みんなで笑顔いっぱい暮らしています。これが私が思う建設産業の魅力だと思いました。

高校に入学してから土木科で学び、建設産業が社会を支えている重要な業界であると知りました。日本は、自然災害がとて多い国です。台風や地震、噴火などにいつ何時襲われるかわかりません。この自然災害が多い中、私たちが安全に暮らしていくには、建設産業に関わる皆さんが汗を流して建設してくださったからなのです。道路や橋、トンネルなど生活に欠かせないライフラインは日ごろから社会の人々の役に立ちます。社会貢献度が高いので、誇りが高くやりがいのある仕事だと思っています。しかし、そのような建設産業を担っている技術者の方々の高齢化や人手不足が進んでいると耳にしました。なおさら、私たちのような土木を学んでいる若い人たちが責任をもって背負っていくことが大切なのだと感じています。

また、アジア諸国ではインフラ整備などの需要がまだまだ見込まれ、グローバルな視点でも魅力が大きいと考えます。発展途上国では、インフラ整備ができておらず、経済的にも不安定です。インフラの未整備によって企業の生産性は約40%損失するといわれています。インフラがきちんと整備されることによって生活の基盤を整え、生活水準を高め、経済成長を押し上げる効果を狙って様々な国が成長していくことを願っています。

これから世界が良くなるにはどこに行っても「質の高いインフラ」を目指すべきだと思います。誰もが利用しやすく、耐久性があり、安全・安心で環境にも配慮がなされている。そのような理想を掲げて、将来仕事に打ち込んでいきたいと考えています。

今、私ができることといえば、高校でしっかりと学んで、私自身が笑顔で建設産業で仕事ができるような準備をしておくことです。この笑顔を地域から日本に、そして世界の人にも届けられるようにして小さな輪が大きな連鎖となって世界がより良くなっていったらいいです。これから辛いことや困難なことがあると思いますが、そんな時は今同じ志を持つクラスのみんなと助け合っていきたいです。三年間学んだことを将来生かされるように日々努力していきたいです。





国土交通大臣賞 空間を創る

やまおか あい
山岡 愛 [愛媛県立松山工業高等学校 建築科 3年]



私には忘れられない場所がある。高2の夏に訪れた、建築家の安藤忠雄が設計した淡路夢舞台だ。

三年前、ものづくりが好きで松山工業高校の建築科に入学した。建物がどうやって造られるのかを学ぶと、今まで何気なく目にしていた建物が新しい見え方をし始めた。また、建築デザイン部に入部し、コンペティションに挑戦する中で、アイデアを一から形にする設計の楽しさに出会った。忙しい学校生活に追われながら、一か月で一つの作品を作り上げなければいけないこともあった。しかしどんな時も妥協せず自分の持つ想いを全部作品にぶつけることの大切さを学ぶことができた。

建築漬けの毎日を送りながら、自分で考えた建物が立体的な形になったり実際に誰かに生活してもらえたりしたら、もっと面白いのだろうな、将来そんな仕事がしたいと思うようになった。建物の設計をする建築士になるには大学の建築学科で学び、設計事務所に就職するというのが一般的な道である。しかし、私の家には大学に行かせてもらえるような余裕はない。進路に迷っているとき、母の神戸にある実家への帰省にあわせて、いくつかの有名建築物を見に連れて行ってもらえることになった。

その頃安藤忠雄の名前は知っていたが、実際に建物を見たことはなかった。だからその旅がそれほど意味のあるものになるとは思っていなかった。淡路島の海岸沿いを車で走っていると、高台の斜面に大きなコンクリートの塊のようなものが見えてきた。百段苑と呼ばれる山の斜面に沿って階段状に並ぶ百個の花壇や、一枚一枚職人の手によって床に敷き詰められた百万枚のホタテの貝殻など、そこには自然と人の手が時間をかけて一緒に創り出した大空間があった。

円形フォーラムの底から見上げた青空や、遊歩道を抜けて目の前に広がった百段苑や淡路島の緑。それまで冷たい素材だと思っていたコンクリートはむしろ温かく、淡路島の色の一つとして違和感なく溶け込んでいた。私が訪れたとき人はほとんど居なかった。しかし、設計した彼の意図や、建設に携わった人たちの息をありありと感じた。

ほかにも六甲の集合住宅や本福寺の水御堂を訪れた。建物があるだけで何も起こらないのだな、と私は思った。そこに人が足を運び、何かを感じたり、生活していく中で初めて意味を持ったりするのだなと強く感じた。安藤忠雄の世界観に魅了された私は、旅から帰り、彼の書いた本を片端から読んだ。彼は世界に名の知れた建築家だが、高校卒業後独学で一級建築士の資格を取り、戦い続けてきたらしい。私はその生き方や考え方に強く憧れた。そして、自分の夢を叶える方法の一つではなく、自分次第でいくつにでもなるのだなと悟った。

私もいつか、訪れた人の心を動かし人生までも動かしてしまうような空間を創る建築家になりたい。自然と共生し、時を重ね、多くの人に愛され続けるような建物をこの手で形にしたい。





不動産・建設経済局長賞

地球を造る仕事

まつのや ゆうせい
松野谷 湧星 [山梨県立都留興譲館高等学校 環境工学科 3年]



建設産業の魅力、それは“地球を造っている”ことだと思う。

私の周りには、建設関係の仕事をしている人が多く、カッコいい仕事だなといつも感じてきた。特に印象に残っているのは、幼い頃、親の知り合いが行っていた家の基礎工事現場である。どうやってこんなにきれいにコンクリートを平らに敷いたんだろう、と驚いたことを覚えている。

また、とても大きな重機やダンプカーをひとりで運転できるようになりたいと子どもの頃から憧れてきた。当時の小さかった私の目線からは、こんな大きな機械を、いとも簡単に手元のレバーだけで動かし操っている大人の姿が、とてもかっこよく見えた記憶がある。

物を作るという観点から言えば、大工さんもいいなと感じていた。しかし徐々に仕事内容を知るにつれて、大工さんもいいが、私は建設の仕事をしたいんだと強く思うようになった。その理由は、建設は地球を造っている感じがして、壮大な仕事にやりがいを感じられそうだからだ。今、高校の授業では、近くの林道に行って測量実習を行っている。これが実際の作業現場なら、作業後には地域の住民が便利に通れる道路になっている。そんなことを想像すると、とてもわくわくする。

今、建設の仕事を希望する人が減っていると聞く。理由は様々だと思うが、私は建設の仕事がとてもかっこいいものだと思っている。しかし、「建設の仕事をしたい」と誰かに言うと、馬鹿にされる。高校では、同級生に、「建設は勉強ができない馬鹿がやる仕事だ」と言われた。他にも、建設はいわゆる3Kだからやめておいたほうがいい、と言われたこともある。しかし、私は、汗を流して体を動かし、日本をもっと良くしようと頑張っている人たちを本当にかっこいいと思っている。白線がきれいに塗られた走りやすい道路や花や緑が植えられたおしゃれな植樹帯の裏側には、作業を行った人間が必ずいる。景観にも配慮したり、段差のない歩道を増やしたり、子どもや障害を持っている人が住みやすい場所をもっともっと増やしたい。これから先、さらに暮らしやすい地球を造るのが私の夢である。

建設作業にはたくさんの人が携わっており、建設に関する資格を持って活躍している人がたくさんいる。もちろんたくさん勉強しなければ資格は取れないだろうが、私はこれからもたくさん勉強して様々な資格を取得し、馬鹿じゃないんだと、見返してやりたい。私は人一倍では足りないから、人三倍以上は勉強しないとダメだろう。でもいつか将来、自分の子どもが出来たなら、“ここは俺が造ったんだ”と言って子どもに見せたい。



不動産・建設経済局長賞

建設業が与える力

しまづ あいか
島津 愛花 [長崎県立大村工業高等学校 建築科 3年]



今現在、世の中は新型コロナウイルス感染拡大による影響で甚大な被害と混乱に見舞われている。毎朝流れてくるニュースはコロナウイルス一色で、もうすでに私達の生活の一部になりつつある。そんな暗い情報で溢れる毎日に日本中、世界中の人々は気を沈めているに違いない。

そのようなコロナ禍の中、私が住んでいる地元長崎では2022年秋頃に開業を予定されている九州新幹線西九州ルート of 建設工事が着々と進められている。開業まで残り一年となった今、長崎県民を初め多くの人々が完成を今か今かと待ち望んでいるのではないだろうか。私自身もこれまで変化していく長崎県内の様子を見て、どんな建物が建つのかどんな町並みになっていくのか楽しみで仕方ない。両親や友達との会話の話題もこの工事完了後の変化した長崎県の事ばかりで、希望と期待で溢れている。何故、こんなにも人々の心に希望や勇気を持たせる事が出来るのだろうか。

例えば、人間と一つのまとまりでくくってみる。何事にもその人の感じ方、表現の仕方があり一人ひとり違った個性を持ち同じような人は存在しないだろう。また建築についてもたとえ建てる条件が同じであっても設計・施工した人が違えば出来上がる建築物は全く違ったものになるだろう。人間と同じように創るとは個性であり、自分が想像した形を自由に豊かに表現できる事は、建設業の大きな魅力の一つだと思う。規模が異なっている人々にもたらす効果は変わる事無く今日も変わらず私達の暮らしに無くてはならない存在となっている。

私はこれまで建築について学んできて、何より一つの物事を違う観点から見ると難しさ、お互いに意見を共有し合い一つのものを作り上げる達成感、大変さに気づいた。仲間と完成させる為に一丸となって熱中できる事、これも魅力の一つである。そんな建設業の魅力から施工に関わった人々の葛藤や頑張りにより造り上げられる完成までの一つのストーリーが空気を伝って人々に希望や勇気を与えるのだと思う。

私は長崎という街が大好きだ。何故こんなにも愛着が湧くのか直感的にしか分からないが、幼少期を楽しく過ごした長崎をもっと知り、盛り上げたい、活発な街にしたいと心から思える。私は長崎に恩返しをしたい。その為にまずは試験を目前に控えている2級施工管理技士の合格、これから必要になる資格や知識をつけるための学習、たくさんの経験を積み努力と向上心を強く持つ事、そして建設業とは何かを知る事を学習し、その中で様々な物を見て触れて自分とは何かを理解し私らしい表現の仕方を確立したいと思う。建設業の多様性を理解し長崎の発展のみならず様々な場面で活躍でき、人々に笑顔を与えられるそういう存在に私はなりたい。

ものづくりから学び発見し、物を作る楽しさや魅力、与える力の偉大さを発信し、これからの建設業界を、長崎を、そして日本中を盛り上げて行きたい。





不動産・建設経済局長賞

建設業が変えてくれた私の未来

みやぐち まさき
宮口 真輝 [熊本県立熊本工業高等学校 建築科 3年]



私は高校を卒業したら、施工管理に関わる職業に就きたいと思っています。その様に考えるきっかけは、学校の授業の一環で、体育館の新築工事を体験させていただいた現場実習に他なりません。その時の実習を行った現場監督の仕事振りに一目ぼれしてしまったからです。

私は、中学校の時は不登校でしたが、卒業目前にして、勇気を出して定時制高校建築科に進学することを決めました。そして現在、家業で父の仕事の手伝いをしながら、学校に通っています。主な仕事の内容は、住宅の外構工事です。カーポートの施工、フェンスの取り付けなどの金物工事から土木工事、砂利引きや土間コンクリート工事、コンクリートブロック積みなど幅広い内容の仕事ですが、誇りを持って取り組んでいます。

この仕事は、カンカン照りや凍えるような雨の中での作業と苦労は多いですが、建物しかない状態の敷地を一から全てを仕上げて、生活感のある空間を造り上げた時の達成感は計り知れない喜びがあります。

これまでの経験も生かすことが出来るような進路選択に迷っている中で、現場監督に出会ったのでした。そして、その監督の姿が忘れられず、施工管理の職業に就きたいという思いが芽生えました。

現在の仕事は、監督からの指示を受けて、それを淡々と施工していただくのですが、いつか自分も現場実習の時の現場監督の様にかっこよく職人の方々を上手にまとめ、作業内容や作業日程の管理をすることで、多くの人に役だてるような人間になりたいと思っています。

この夢は、今やっている仕事の中身とは多少変わることにはなりますが、今の仕事で得た経験や知識は必ず生かせるのではないかとと思っています。

職人さんたちの気持ちを理解し、施工の手順を分かったうえで指示できる。その為には、これまで以上に勉強して知識を得る必要があります。

私は今、月曜日から土曜日までくたくたになるまで仕事をし、夕方から学校に通っていて、肉体的にも精神的にも辛いことが多いですが、今後の現場管理をするうえで必ず役に立つと信じています。その為に、これまで以上に日々の仕事も頑張りつつ、しっかり学校で勉強し、様々な資格を取っていきたいと思います。

建設産業の素晴らしさを知り、こんな大きな夢を語れるようになりました。これらの経験や出会いもあったからこそ、夢を叶えたいと思う私がいいます。建設業が私を変えてくれました。昔の私とは違う、みんなから頼られ、信頼される人間になりたいです。これが私の建設産業に対する想いです。



優秀賞

叶えたいこと

黒古 ひなた^{くろご} [栃木県立真岡工業高等学校 建設科 3年]

私の夢は設計士になることです。この夢は高校に入学してから見つけた夢です。私は小学校高学年から「本当に叶えたい!」と思えるような夢がなく、高校選択の際にも特にやりたいことが無かったため家から1番近くて、技術の授業の成績が良くてもものづくりが好き、叔父が建設を営んでいるという何となくの理由で工業高校の建設科に入りました。ですが、2年生の時から始まった建築製図で初めて自分で設計した時、「設計って楽しいな」と感じてから、設計の仕事に興味をもち、それから設計士のことを調べたり建築の勉強や実習をしたりしていくうちに興味から夢へと変わりました。

私は設計士になったら叶えたい事があります。それは母が年をとっても暮らしやすい家を設計し、建てあげることです。幼い頃両親が離婚してから、反抗期で沢山迷惑をかけても見捨てずに女手一つでここまで育ててくれた母に親孝行をしたいからです。母は今住んでいる家が「収納が少なく不便」と言っていたので収納が多くて、老後も安心して暮らせるようなバリアフリーの住宅を設計したいなと思っています。母の家以外にも私が一人前の設計士になり設計を任せられたときは、お客さんとよく話し、家族構成やライフスタイルの変化に柔軟に対応し、最期の時まで自分の家にいたいと思ってもらえる住む人の一生に寄り添えるような設計士になりたいです。

私は来年社会人になり、建設業に就職したらやりたいことが2つあります。1つ目は、女性でも働きやすい環境づくりです。昔よりは女性の職人さんや現場監督さんが増えましたがまだまだ男性主体の業界なので、育休を取りやすくしたり、時短勤務など子供がいても仕事を無理なく続けられるようにしたりしたいです。2つ目は、建設業で働く若い人を増やしたいです。大手の建設会社では若い人も多いですが、小さな建設会社などは高齢化が進んでいてこのままではどんどん建設業が廃れていってしまうので、SNSを利用して若者の目に止まりやすいところで宣伝し、建設業に少しでも興味をもってもらいたいと思っています。

今は少しでも夢を叶えるために2級施工管理技術者試験の勉強や日々の授業、実習、定期テストに励んでいます。CADや手書きで図面を描くことはまだまだ苦手で時間がかかってしまっていますが、一枚一枚丁寧に仕上げることを意識し、何枚も図面をこなしたと図面を描くスピードを早くして、どんなお客さんも満足させられる立派な設計士になれるようにこれからも努力し続けたいと思います。



優秀賞

苦勞の先に

にしみや ときお

西宮 朝央 [栃木県立真岡工業高等学校 建設科 3年]

「建設業って大変そうじゃない?」私が中学三年の時、工業高校の建設科に入るために勉強していると、友人に言われた言葉でした。その時私は少しだけ共感してしまいました。私が建設科に入ろうと思ったきっかけは、自分の父が大工の仕事をしていた、父の仕事をしている姿を見て自分自身も建設業の仕事に就きたいと思ったからでした。その父の姿を見ているからこそ、建設業の大変さは理解していました。

「でも、大変なことはあるけど、建設業にしかない魅力だってあるよ。」私はそう友人に話しました。しかし、私の友人はあまり納得していないような表情でした。

それから私は工業高校の建設科に入学することができました。建設業に関する様々な専門教科を学び、建設業について様々な事を知ることができました。学んでいく中で、一番感じた事は、建設業のやりがいでした。特に実習や製図の時、課題が完成した時の達成感はたまりませんでした。

学んでいるうちに、進路のことを考えるようになりました。自分の将来を考えているとき、中学校のとき「建設業って大変そうじゃない?」と言われたことが何度も頭をよぎりました。

「そんな大変な仕事で自分は何がしたいのだろう?」そう悩み続けました。

悩み続ける日々が続く中で、授業中にあるビデオを見ました。それは建設業の仕事をインタビューしているもので、実際に働いている人たちの話を聞くことができました。

「建設業はやりがいがあるし、人々の役に立つ仕事です。」そう話していることを聞き、私ははっとしました。今まで私は自分のことしか考えていないことに気が付きました。建設業とは、人々が安全で快適に暮らしていくために無くてはならないものであり、色々な人と協力していくものだと思いしました。

私は今、部活で建築コンペに取り組んでいます。コンペにはお題があり、そのお題に沿って住宅を考えていきます。どんなお題であれ、そこに住む人が快適で暮らしやすく、笑顔になれるような住宅設計に取り組んでいます。考えている中でうまくアイデアが出ないこともあります。やはりそこで建設業は大変だと感じますが、それを乗り越えて人のために考えた家ができた時は建設科に入ってよかったと心から思います。

建設業とは、大変なことであるという考え方は無くなったわけではありませんが、それでも今は建設業の魅力に色々気が付くことができました。苦勞があるからこそ乗り越えた先に人々の安全や笑顔があり、毎日を快適に暮らせるのだと思います。

中学校の時の友人に会う機会があれば、「大変だからこそ、建設業は素晴らしいよ!」と笑顔で伝えられたらいいなと思います。



優秀賞

わたしたち若者がどうあるべきか

さいぐさ れん
三枝 蓮 [山梨県立甲府工業高等学校 土木科 3年]

私は、甲府工業高校に入学してから約二年半の期間で多くの建設現場を見学したり、いろいろな最新技術の体験をしたりしてきました。その中でも、強く印象に残っているのは測量作業のICT技術です。測量会社の方が行ってくださった出前授業の中で、3Dレーザースキャナや大型のドローンを使った測量作業などに触れることができ、今後の土木業界の魅力をたくさん感じ取ることができました。

建設業界で働いている方々は、自分たちがつくるものを最終段階の完成形まで頭の中に思い描いた状態で作業していて、自分の仕事に誇りを持ってやっているところに大きな感銘を受けました。私自身もそれを知るまでは建設業は仕事がつくて、大変な業種だというイメージを強く持っていました。しかし、見学や体験を通してそのようなイメージを払拭することができました。一つの現場の中で現場監督の方も作業をしている方も、立場は違ってもみんな楽しそうに仕事をしていました。特に、私がいいなと感じたところは、職場での働き方です。現在いろいろなところで働き方改革という言葉を目にします。建設産業でも、多くの会社で週休二日制を目指して頑張っているということを知りました。周回からきついというイメージを持たれている建設業ではありますが、徐々に働き方も変わりつつあることを知り、それも今後の建設産業の魅力かな、と思うようになりました。このように、ものをつくる魅力だけではない建設産業の魅力を、これから就職する私たち若者がどのように受け継いでいくかということが重要になると思います。

私たち若者が高校卒業後、いろいろな企業に就職しますが、そこでどのようなことをするか、また、これまでに築き上げられてきた建設産業に対するイメージをどのように変化させていくか。私たちが試されるものだと考えています。これまでの建設産業全体のイメージを壊さずに、さらに新たなものを築き上げていくために、一生懸命働いていきたいと思っています。そのためにはどうすればよいか。私は、自分自身の仕事にやりがいを持って一生懸命やりたいと思っています。やりがいがないと仕事に対するやる気は出てきません。決していいものづくりはできないと思います。また、私たちがつくるものは、常に誰かに期待されている、ということを忘れずにやっていきたいと思っています。

建設業全体のイメージをより良いものにするためにも、私たちは建設業の魅力を未来につなげていく努力をしていかなければならないと思います。



優秀賞

見えない力

やました あつ は
山下 温葉 [静岡県立科学技術高等学校 建築デザイン科 2年]

建設産業の魅力とは何か。私が考える魅力とはこうだ。「見えない力で私たちの生活を豊かにし、支えている」こと。

家から外に出ると、道路や橋などの交通インフラ、または学校や病院などの公共施設、ビルや住宅が当たり前のように存在している。それらを、私たちは日常の中で繰り返し利用している。しかし、自分より高い建物をよく見ながら歩いたり、道や道路の状態を考えながら歩いたりすることは滅多にない。つまり私たちの多くは、それらのものが身の回りに存在していることを当然だと思い込み、そのものの歴史的な背景を考えたり、知ろうとしたりすることをしない。

しかし、それらは私たちに大きな影響を与え、私たちの暮らしを支えている。「もし、交通機関がなくなったら。」「もし、あの建物がなくなったら。」普段の自分自身では、考えようともしないことだが、これらのことを初めて知ろうとしたとき、私たちは建設産業の偉大さに気が付くことができるだろう。

また、設計や積算から大工や技能士まで、建設産業といっても幅広い役割が存在している。どの仕事も、人々の生活を考える責任とやりがいを感じられる仕事なのではないだろうか。例えば、設計は人々の語る夢を形にしている。また、技能士は人々の理想や、人々の安全を実現させている。

このように、建設産業は私たちと直接的なつながりは少ないが、相互に間接的につながっていることは事実である。また、建設産業は公共施設などの建築物はもちろん、道路や橋などの交通インフラまで、私たちの生活をより便利、安全にしている。

私たちは、この建設産業の魅力により多くの人が気づき、さらに広げていくべきである。建設産業の魅力である「人々を陰で支えている」「人々の生活を考えるやりがいがある仕事」という事実を広げること、人々は建設産業の存在の大きさや有難さを実感し、より豊かな生活をするようになるだろう。

私は、建設産業の現場を度々見ているが、彼らはいつだって変わらぬ表情をしている。夏の暑い日も寒い冬の日も、土砂降りの雨の日だって、いつでも真剣だ。そして、命がけで作業を進めている。私たちは、そんな彼らの努力を忘れてはいけない。

彼らの努力で私たちの生活が成り立っている。建設産業なしでの生活など、現実味がなく、考えることもできない。それほど建設産業とは人々にとって必要で、重要な役割を果たし続けている。

私が考える建設産業の魅力とは、人々の知らないところで私たちのために責任のある仕事を続け、それにより人々の生活をより安全に、豊かにしていることだ。



優秀賞

宮大工を目指して

くりもと さや
栗本 紗弥 [静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年]

私は将来宮大工になりたい。いや、必ずなる。宮大工という仕事は、古建築の建設当時の姿を、後世に残す仕事だ。残すことで伝統構法までも残することができる。作業に携わったものが未来の国宝に指定されるかもしれない、非常にやりがいのある仕事だ。

しかし、現在宮大工の人数は年々減少の一途だ。加えて、職人の高齢化もある。後継者不足の解消は喫緊の課題である。広く建設業界で言われている、「汚い」「きつい」「危険」の3Kも理由として挙げられる。

現在、宮大工の人数は9万人、大工の人数が21万人である。大工の需要予測人数は30万人であるため、仕事が回らなくなっているのだ。それにもかかわらず、宮大工の仕事は「男性の仕事」という風潮が根強く残っており、「女性だから」という理由で、弟子入りを断られた例は少なくない。

私は、男性に負けない宮大工となるために、建築科に入学し、建築研究部に入部した。部活動では、設計競技いわゆるコンペや技能検定、さらにはものづくり大会とさまざまなことに挑戦できる。私は、技能検定やものづくり大会で良い成果を残すために、隙間時間をみつけては日々努力してきた。その結果、ものづくり大会に参加させてもらえたとし、二年生で建築大工二級技能士を取得することができた。コンペでも入賞できた。

女性は、「弱い」「根性がない」といわれることが多々ある。しかし、志は男性も女性も変わらない、同じである。女性だって日々努力している。努力した女性は、男性以上の力を発揮できるのだ。「女性だから」という理由で弟子入りを門前払いするのは間違っている。女性の能力を見極め、認めることが重要だろう。

私は、2011年に発生した東日本大震災をきっかけに大工になりたいと考えだした。しかし、反対の第一声は家族からだった。浜松工業高校に入学することすらも反対されたほどだ。それでも私はあきらめなかった。大工になりたいという思いを持ち続けたし、両親を納得させるだけの努力を続けてきた。これまでの結果を見た両親は、今では応援してくれるまでになった。この応援はさらに技術を磨いてうまくなりたいという私の思いを後押し、ますます私自身を成長させてくれる。

女性への偏見が建築業界の一部に今でも残ることは知っている。しかし、私はもっと技術を磨き、男性に負けない技能を取得する。さらに、宮大工となり活躍することで、女性という働き手を認めてもらい、多くの女性に希望をもたらしたい。そして、古建築を残していきながら女性に関する偏見を無くしていく。



優秀賞

リノベーションにかける私の夢

すずき あき
鈴木 阿季 [静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年]

私が建設産業でやりたいことは、リノベーションという視点でまちを豊かに「まちづくり」することだ。

リノベーションについて考えるようになったきっかけは、令和二年四月に開催されたリノベーションスクールに参加したこと。そこでは老朽化した建物を取り壊すのではなく、今ある建物を新しい使い方をして新たな価値を創り出して「まちづくり」をする手法が紹介された。

高校で建築について学ぶ中で、新しい建物が建築されるまでの工程に多くの人々が携わっている事を知った。そこに携わる人はどの分野の人であっても職人であり、技術者であり、他の人には真似のできないプロフェッショナルであると思う。スクールや高校で学んだことを生かし、職人達が創り上げた建物の価値がいつまでも失われないう、また新しく付加価値がつくようなサポートが出来る立場になりたいと考えた。今ある建物に手を加えて再生させることで、もう一度その建物に新鮮な空気が戻ってくる。新しく蘇ったものが徐々に増え、街全体が明るくなって欲しい。

今、街を歩くと古くなった建物やシャッターが降りている建物がたくさんある。私はそれを見ると少し寂しい気持ちになる。新しくきれいな建物に目が行きがちだけれど、その隣に人が多く集まる古い建物があったら古い建物にも興味をひかれるはずだ。そして、お店を開きたい人や新しいことに挑戦したいけれど場所がなくて困っている人もいるだろう。リノベーションはそのような人たちにも新鮮な空気を生み出してもらえる手段である。

私が協力できることは何かと考えた時に、なぜ、私が建築科に入ったのかということと重なった。私が建築科を目指した動機は、毎週放送されていたテレビ番組で自分のライフスタイルに合った理想の家を求めて建築士と話し合いながら建てた家を嬉しそうに紹介するお施主さんの笑顔を見たことだ。相手のライフスタイルを知り、要望を丁寧に聞き、予算内で設計していく建築士に魅力を感じた。リノベーションスクールに参加したことが私の将来やりたいことを決定づけた。「自分自身が楽しく場を開くと、思いある人と繋がれる」その時心に残った言葉だ。

お客様に寄り添い、リノベーションすることで笑顔になれるようなプランを提供できるようになることが、私の夢への第一歩だ。いつの日か私の設計した家で、テレビ番組でみたお施主さんのように自分の家に喜びと誇りをもって、未来の生活を描いて欲しい。そのひとつ一つの積み重ねで生まれ変わった街を見てみたい。



優秀賞

大工を志した私の挑戦

おおはら しおり
大原 志織 [福井県立敦賀工業高等学校 建築システム科 3年]

将来、大工になる。中学生の頃からこの目標を強く意識した私は、工業高校に入学し建築の専門分野の勉強に打ち込んでいる。

私が大工になろうと決意したきっかけは、大工である父の仕事を小さい頃から見てきたことにある。

中学二年生の夏、父の働く建築現場を見学した。そこには夕方遅くまでたった一人で明日の作業の準備を入念に行う父の姿があった。他人任せにせず、細部まで徹底的にこだわる理由は、他の職人さんの負担を減らそうとしているのだろうか。いや、それ以上に父は、ものづくりが好きだったのだ。後片付けや準備まで、万全にしなければいい仕事はできない。こうしたものづくりへの情熱が、父の大工の仕事への原動力になっている。一級建築大工技能士という難関資格を独学で取得したことも、より高度な大工技術を追求したいという思いからだ。私にとって、父は「建築の師」でもある。

建築の仕事を目指した私だが、不安に思っていることがあった。建設業ではやはり「女性」であることはハンデになるのではないか。建設現場にはまだまだ女性が少ないのが現状である。

決意を強くした今、私は、女性であるがゆえに体力面でのハンデがあったとしても、それを知識と技術でカバーしたいと考えている。これを自ら証明するために、私は技能検定受験に挑戦した。

今年の二月、女性では受験者が少ない資格である鉄筋施工技能士三級を受験した。鉄筋施工技能士とは、鉄筋コンクリート造の建設に欠かせない工程である鉄筋組立の際に必要な国家資格のことだ。

女性の受験者が少ない理由は、やはり鉄筋が重くて運ぶのが大変な点にある。最初、力に自信のない私は、鉄筋の重さに足元がふらついた。しかし、練習を重ねるうちに、力で男性に勝る事はできなくとも、段取りと運ぶコツをつかむことができれば女性の私にも十分行える作業であることが分かった。さらに、鉄筋の結束だけを考えると、大切なのはやはり繊細さや正確さだ。たとえ、運搬や移動に時間がかかっても、結果として仕上がりと完成時間は他の男性の受験生と変わらないレベルまで到達できた。休日や放課後の練習を積み重ねて合格を手にした私は、決して女性だからといって最初から建設業に向いていないと悲観する必要はないと実感した。

夢は、大工になり実務を続けながら将来、一級建築士の資格を取得することだ。建築士の資格を取得することで、住宅の設計から施工まで責任を持ってお客様の要望に応えることができる。さらに、私が父のような大工として認められ、住宅建築の仕事をしていくことで、これから建築を志す女性の目標の一人になりたい。「建設業は男の仕事だ」と言って自分の夢をあきらめてほしくない。これからさらに建設界で活躍する女性が増えることを願い、その一人として建築現場に立てるよう、自己研鑽を積み重ねたい。



優秀賞

私が伝えるもの

とつかわ ゆう 戸津川 由羽 [広島県立広島工業高等学校 建築科 3年]

今日、私たちの身の回りを見渡してみると、たくさんの建築物が立ち並んでいる。建物の歴史は長く、時代の変化とともに用途と形状が変化していった。長い時を越え、それぞれの伝統や文化を引き継ぎ、昔の建物とは見た目も形状も違うが、世界にはそれは美しい建築物が存在している。

私は建物が大好きだ、観るのも、設計するのも、作ることも。私が建物を好きになるまでは、日常的に存在する建物の事を当たり前の存在だと思っていた。しかし、私が中学校に入学して間もない頃、建築物の魅力に出会った。私は中学では、美術部に入部していた。そこで美術部の顧問をしていた先生が、自分で作った建築の模型を見せてくださった。私はその模型を見た瞬間、心を打ち砕かれた。その模型は細かな細部まで表現出来ていた共同住宅だった。単調なものではなく、複雑に入り組んでいるものだった、それは私にはとても美しいものに見えた。そこから、私の建築物に対する見方が変わった。身の回りの建物にも目を向け、世界に存在する建物にも目を向けた。そこには私が想像していたよりもずっと美しい建築物が存在していた。私が住んでいる街には存在しない、複雑で歪な形状をした建物、直線的ではなく曲線的に作られた建物、全面ガラス張りの建物など。こんな建物が世界には存在していたなんて、そんな世界をしらない私の世界は狭いと感じた。そこから私は、独学ながら建物の設計をして、実際に模型も作った。プロが作るものよりも完成度は低いですが、実際に自分で設計したものが作られてできる光景を見ることは、とても感動した。しかし、時間がとてもかかってしまい、大変であった。私はその時、建物を完成させるのは、ひとつの会社だけであったと思っていた。しかし、高校生になって、実際は幾つもの会社、人々が協力して作り上げて行くものであると知った。建築士が設計し、大工、左官、屋根工事、鉄筋工事、舗装工事などと約29種類もの建設業者が関わり、ひとつの美しい建築物が完成するのだ。提出された設計図どおりに、建築主、お客様のイメージどおりに建物が完成するということは、建設業者とのコミュニケーションが良いから、業者同士が信頼して連携できているからだと思った。

建設産業は、数多くの職人、人との繋がりがあがる。国境を越え、海外の人達と協力して、建物を作る事もある。こうして出来上がった建物が、建って、残され、保存されていくことは、設計した人や、工事を行った人達にとってはとても誇らしいことだと思う。これこそ、建設産業でしか得られない魅力であると思う。私は、これから進んで行く人生で、たくさんの建築物に関わって行きたい。そして、これから生まれてくる次世代の人たちに、建築産業の魅力を知ってもらえる建築物を作り上げて行きたい。



優秀賞

守るべきもの、守れる強さ

なが や いわ お
長屋 肇雄 [山口県立萩商工高等学校 電気・建築科 2年]

守護神。私は冒険物語の小説が好きだ。私はその中で主人公よりも宝や大切なものを守る守護神が一番好きだ。この建設産業は守護神にぴったりの仕事だろう。

この建設産業は津波、地震等の災害、泥棒などの人間から、その住民の命、大切なものを守っている。私は憧れの守護神のような仕事をしてみたいと思った。

先日、現場見学に行った。公共の建物で大規模な工事だった。特に五大管理「QCDSSE」が心に残った。そこで私は品質はもちろん大事だが、他の一般の方々をも気を配る環境、周辺環境が大切だと分かった。守るべきものは住民や使用して下さる方々だけじゃなく、通行する方、隣地に住む方々の命をも守らなくてはいけないと学び、感動した。自分のやるべきことをするだけでなく、周りを見ながら予測し、行動するという、本当にいろいろな方の命、人生、大切なものを守っているのだと自分の器の小ささに落胆した。それほどまでに重く、大きい責任が課せられるのだと感じた。

私が保育園の年長の時、東日本大震災があった。そこにすぐに駆けつけた知り合いの大工さんが仮設住宅を建てに行った。多くの方に生きる希望を与え、命を守った知り合いの大工さんが本物の守護神だと思う。赤の他人をなぜ助けるのかという疑問の壁を越えていると思った。「守る」というのがあたり前だと感じるこの建設業界。自分の死と隣合わせ。自然災害を相手に命を尽くした職人方、命がけで守ったたくさんの方々の命、人生を、今度は私たちが守らなければならない。先人方のバトンを受け継ぐ責任、多くの方々の命を守る責任。これらを今、背負っている方々がまた、日本、世界を発展させていく。今ある私達の生活の基礎を作って下さった先人たちのものをしっかりと私達が引き継いでいかななくてはならない。

私は憧れの守護神になるためには、とてつもない忍耐力と精神力が必要であると感じた。誠実で守るものを確実に守る。自分を犠牲にして多くの人々の命、人生を守る。そういう大切な仕事が一番の建設産業の魅力だと思う。人を守り、人を救い、人をつくる。ものづくりは人づくりだと感じた。自分の成長、そして使用して下さる方の命を育む。こういった大切なものを守り、育む者が未来、現在をつくりあげていく。そして経済、人類を成長させていく。全てを守り、成長させることができる者が、私の一番の魅力、憧れの守護神だ。



優秀賞

伝統をつなぐプロフェッショナルに

つじた ひいろ
辻田 陽彩 [長崎県立長崎工業高等学校 建築科 1年]

私が将来目指す職業は宮大工です。宮大工になって実践したいことが三つあります。一つ目は寺社復元作業、二つ目は新たな寺社の建築、三つ目は町の歴史を守る古い建築の復旧です。

私は幼少期の頃から、寺社好きの母に連れられ神社やお寺巡りをしていました。まだ幼い私には面白味が分からなかった寺社建造物でしたが、小学六年生の時に見た中尊寺金色堂の壮大さに心震えるほどの衝撃を受けました。そして、中学校の修学旅行で訪れた京都では、下鴨神社の塀の修理がなされている現場に遭遇し、宮大工の方々が僅かなズレにも心をつかい作業する姿を見て、緻密な仕事ぶりに感嘆したとともに、私もこの仕事に就くと心に決めました。私が建築の魅力に気付いた瞬間でした。

私はテレビで宮大工の特集をみたことがあります。釘を使わない「木組み」工法を見て思わず圧倒され、感心しました。複雑な知識と正確な技術で木と木で骨組みを組み上げていく工程は、日本ならではの建築の在り方です。伝統を守るだけではなくこれを用いて寺社を建造することで、昔からの思いを繋いでいるように感じました。木を生かす技法、どんな小さな建物でも随所に職人たちの技術が生きていること、それを継承し次に繋がっていくことが深く心に残りました。その後は、いろんな寺社建造物への興味がさらに強まり、魅力を感じるようになりました。見れば見るほど「自分の手で寺社建築に関わりたい」、「自分も伝統文化に触れ、貢献したい」、「神社仏閣の修繕に携わりたい」という思いが一層強くなりました。寺社建造物は、人間より長い年月を生き続けていきます。宮大工の仕事には、長い年月が経っても朽ちることなく存続している建造物を高い技術で守り、そこからさらに次の世代へと長く引継いでいくという歴史を積み重ねる醍醐味があります。幼い自分が圧倒された荘厳な佇まいの寺社建築を次は自分の手で再生していくこと、さらに後世に残っていくような価値ある建造物を作ることが、私が目指す目標です。いつか自分の手で、後世に残る新たな寺社建築に取り組めたらと思います。また、その一方でさまざまな地域の特色ある古い建造物を自分の腕や技術で復旧し、その街の歴史を残し伝え、特色ある地域づくりに貢献できれば、その仕事はとてもやりがいのあるものになると思います。今を生きる私たちは、遠い過去から受け継がれてきた高い伝統技術を後世に手渡していくという任務があります。そうすることで次世代の建築文化が発展していくと思います。

私は今、工業高校の建築科で学んでいます。高校でしっかり学んだ後は宮大工の専門学校に進み、さらに知識と技術を身につけ、宮大工となり、精進し、いつか日本になくてはならない宮大工になる夢を叶えたいと思います。



優秀賞

あたりまえ

うえむら ひなた

上村 妃向 [長崎県立佐世保工業高等学校 建築科 3年]

あなたは建物に感謝したことがあるだろうか。私はその経験がない。なぜなら、建物があるのは「あたりまえ」のことだからだ。そして多くの人にとって建物は感謝する対象ではないのではなかろうか。住宅・学校・病院・商工業施設など、そこで働いている人は感謝されることが度々あるが、建物については皆それほど意識をしない。でもそんな在って「あたりまえ」のものをすることが建設産業の魅力であり、やりがいだと私は思っている。

私の中にある建築の欠片を見つけたのは小学生の頃だった。私は本を読むことが好きでよく買ってもらった。だが、私は本棚を持っていなかったので自分で組み立ててつくるタイプの本棚を買ってもらった。「ゆっくり少しずつつくりなさい。」と言った母の言葉を聞き流し、私は本棚の入った大きな箱を開け、一日もかからずにつくりあげてしまった。その時のことは未だによく覚えている。私はドキドキ、ワクワクしていた。昼食を食べることさえ忘れて無我夢中になって説明書と出来上がっていく本棚を見比べていた。本棚が出来上がった頃には、私の心はものづくりの魅力に引き込まれていた。それまでコロコロと変わっていた将来の夢やしたいことがこの時からはっきりとしたものになったのだ。ものづくりのことについて何も知らなかった私は、いろいろなものづくりについて調べ始めた。調べる中で、出会った建築、それが私と建築との出会いだった。

現在、私は工業高校に在学し、建築分野を学んでいるわけだが、まだまだ私の知らないことや学ぶべきものがたくさんある。そんな私も将来就きたい職業を見つけた。それは現場監督という仕事だ。現場監督という仕事に就き、建物をつくる一員となって働きたい。人々の「あたりまえ」をつくっていくこと、私はこれがしたい。

ある人は女性が現場監督をしてそれが務まるのかと言った。でもそんな疑問は、人々の「あたりまえ」をつくっていることを考えたらちっぽけなものだと思う。建築についての知識・コミュニケーション能力・経験など、私には足りないものがまだまだあるのは事実だ。それを今から一つずつ吸収し、自分のものとして取り込んでいく。そして私は夢を叶える。今まで誰かにつくってもらっていた「あたりまえ」の日常を今度は自分が誰かとつくりあげていくのだ。

私が建築産業でやりたいこと、それはその場所にあって「あたりまえ」で感謝もされない建物(もの)をつくることだ。



優秀賞

つなぐ

よしかわ みこと
吉川 美琴 [長崎県立佐世保工業高等学校 建築科 3年]

建設って何だろう?ふと疑問に思い、私は国語辞典で調べました。そこには、「自然に手を加えたり古い建造物などを壊したりして、そこに新たに有用なものをつくり上げること。新たな理念・発想に基づいて、今までになかったものを打ち立てること。」と書いてありました。でもこの二文だけでは分からない、そう思ったので私は建設産業について考えてみることにしました。

小学校六年生の頃、新築・リフォームをテーマに扱うテレビ番組を見たことがきっかけとなり、私は建設産業の中の建築という分野に興味を持ちました。ニーズに合わせたデザインや機能を提供する技術力と、誰かの居場所をつくる仕事に魅力を感じ、工業高校へ進むことを決めました。

工業高校では専門の授業や様々な実習に取り組んでいます。建築を学んでいる今の私が思う建設産業の魅力、それは「つなぐ」ことです。竣工後にその建物を利用する人々のつながりを持たせることはもちろんですが、施工段階で現場を共有する技術者・技能者同士のつながりも生み出します。そう感じたのは、私が実習を通して体験したことがきっかけです。測量をするにも、木材の加工をするにも、足場を組むにも、材料実験を行うにも必ず危険が伴います。だから、より安全に、より丁寧に、より効率よく作業をするために、周りの皆とお互いを気にかけて協力する必要がありました。一人ではできないことばかりで、ここまで人と人のつながりがある仕事は他にはなく、建設産業ならではの魅力だと私は思います。また、普段何気なく通っている道路やトンネル、ヒトやモノが世界と行き来する空港や港湾の建設は、地域と地域、国と国のつながりを広げています。

さらに、建設産業は持続可能な社会の実現に貢献できる力を持っていて、未来へつなぐ役割も担います。SDGsには十七の目標が設定されていますが、先進国の日本でも達成できていない目標があることを学びました。その中に、「住み続けられるまちづくりを」という目標がありますが、エネルギーの大量消費や過密・過疎による環境への悪影響が原因で達成できていません。しかし、自然環境と隣り合わせで深い関係を持つ建設産業ならば、この目標を達成することができると考えます。そうすると、「海の豊かさを守ろう」「陸の豊かさも守ろう」という目標の達成にも近づき、現状を変えられるはずです。

このように建設産業は、あらゆる場面で懸け橋のように「つなぐ」存在となります。建設産業とは何か、その答えは私がこの先直接建設産業と関わることで、もっとはっきりと見えてくるのだと思います。私はいつか建設産業ってこういうことだよと胸を張って言える技術者になります。夢は一級建築士、建てる人の夢を現実へ、かたちへとつなぎます。



優秀賞

将来への希望

よしかわ ゆうご
吉川 雄梧 [熊本県立熊本工業高等学校 土木科 3年]

私は、熊本地震を中学1年生の時に経験しました。震災によって、道を通ることができなかったり、水道を使えなかったりして、当時の生活がとても大変だったことを今でも覚えています。また、普段の生活で舗装された道路や生活用水を使えることが、あたり前のことではないことを実感しました。普段のあたり前は、建設業があって成り立っていて、私も社会を支えられる人材になりたいと思い、熊本工業高校の土木科に入学しました。

入学してから今までの中で、建設業の魅力を2つ発見しました。

1つ目は、日常生活と密接なものであるため、日本のどこでも必要とされる仕事であることです。災害で道路が分断されると食料や飲み物を供給することができなくなり、日常生活を送ることが不可能となります。その際には、誰かが道路復旧を行う必要があり、土木技術者が第一となって復旧に取り組みます。実際に令和2年の7月豪雨で、熊本では土木技術者の方々が現地調査から施工までを行われました。近年の日本では、自然災害が増えていて土木技術者が必要とされています。そのため、一生涯にわたって仕事が続く仕事だといえます。日本中で必要とされていることが1つの魅力だと思います。

2つ目は、仕事のやりがいや達成感の大きさです。社会の基盤となる道路や建物は、人々にとって欠かせないものなので、人から感謝される仕事です。建設が終わった後に、道路や建物を使った人から「ありがとう」の言葉を聞くと、仕事を頑張って良かったと達成感を感じることができると思います。

これらのことは、建設業の魅力の一部にすぎないと思います。建設業は、「きつい」、「汚い」、「危険」といった3Kという言葉が世の中に出ています。その悪いイメージの言葉から、「給与が良い」、「休暇が取れる」、「希望が持てる」といった新3Kを目指して建設業界の方々が頑張っておられます。だから、これからもどんどん魅力があふれる業界になっていくと思います。

社会に出て働くということは、どんな仕事でも初めは大変なことばかりだとよく聞きます。大変なことがあっても、大変さに勝るやりがいや魅力があれば、頑張っていけると思います。これからの建設産業にもっともっと良くなっていくように期待をして、希望を持っていきたいと思っています。そして、将来私も建設業に携わる1人の技術者として、この業界をより良くしていけるように頑張っていきたいと思っています。



MEMO

<https://www.shinko-web.jp/>



建設産業人材確保・育成推進協議会 事務局／一般財団法人 建設業振興基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-2-12 虎ノ門4丁目MTビル2号館6階 TEL 03-5473-4572 FAX 03-5473-4594
E-mail jinzai@kensetsu-kikin.or.jp URL <https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/>

※ 本冊子掲載記事の無断転載を禁じます。

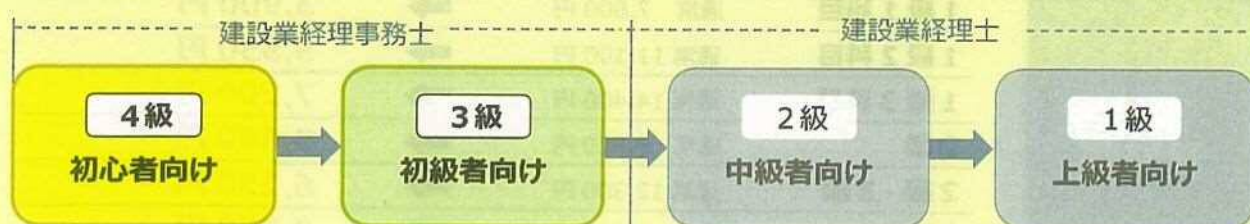
建設業経理士 建設業経理事務士

建設業の経営に
役立つ資格です



建設企業で注目されている資格です！

建設会社は、品質の優れた建物や道路などを造ることが最も大切な仕事ですが、工事ごとにコスト管理をしっかりと行い、一定の利益を上げなければ会社が存続していく事はできません。建設業に特化した会計知識は建設業経営に不可欠なものであり、このための資格が「建設業経理士」です。



●高校生が「建設業経理事務士」を取得するとジュニアマイスター顕彰制度の得点（4級1点、3級4点）が得られます。

ジュニアマイスター顕彰制度とは

工業高校の生徒の意欲や技術・技能向上を目的とし、資格取得や競技大会の成果等に点数をつけ、その合計点で「(公社)全国工業高等学校校長協会」が表彰する制度です。

●「建設業経理士」が所属している企業は、公共工事を受注しようとする場合に必要経費事項審査において加点されます。

経営事項審査とは

公共工事を発注者から直接請け負おうとする建設企業が必須で受ける審査です。この審査によって、「経営状況」「経営規模」「技術力」「その他の審査項目」について数値化し、各公共発注機関が評価しています。

建設業の仕事の流れが学べます！

建設業は、他の製造業とは異なり、注文を受けた後にモノを造ります。（これを「請負」といいます。）請負は、モノが出来る前に販売価格が決まっています。そのため、工事に発生するお金やモノ（材料等）の動きを管理しながら会社としての利益を同時に生み出すようにしていく必要があります、その特徴を理解して実践するために、この資格が設けられています。

合格者数（令和3年1月31日現在）

4級	3級	2級	1級	計
試験：45,013人 (合格率 78.9%)	試験：189,820人 (合格率 64.3%)	321,533人	27,510人	840,696人
特研：166,103人 (合格率 97.5%)	特研：90,717人 (合格率 92.4%)			

※合格者数は累積、合格率は直近1年間になります。

資格を取得するには2つの方法があります

方法1 自分で学習する

全国の都道府県で開催する「検定試験」に合格する！
(検定試験は、1級・2級は年2回、3級・4級は年1回の実施)

方法2 特別研修に参加する ※特別研修は3級・4級のみ実施

学校単位で開催する「特別研修」に皆で参加し集中学習、最終日に行う「検定試験」に合格する！



詳しくは
裏面参照

高校限定 学校単位の申込による 検定試験と特別研修のご案内



「特別価格」で受験・受講ができます！

検定試験

学校単位の申込は**受験料が半額に！**（学校単位での申込みであれば1名から受付けます）

試験日	【令和3年度】	令和3年9月12日（日）	(1級・2級)
		令和4年3月13日（日）	(1級・2級・3級・4級)
受験料	1級1科目	通常 7,800円	➡ 3,900円
	1級2科目	通常 11,100円	➡ 5,550円
	1級3科目	通常 14,400円	➡ 7,200円
	2級	通常 6,800円	➡ 3,400円
	2級・3級	通常 12,300円	➡ 6,150円
	3級	通常 5,500円	➡ 2,750円
	3級・4級	通常 9,900円	➡ 4,950円
	4級	通常 4,400円	➡ 2,200円
受験地	全国47都道府県主要都市		

特別研修（講習と検定試験をセットで実施）

4級と3級の特別研修は学校に講師が講義にまいります！集中学習で**合格率もUP！**

研修日数	4級：連続した2日間 3級：連続した3日間 (時間帯 9:00～12:00、13:00～16:30) ※ 研修時間は開始時間の前後等対応可能です。
受講料	【4級】 8,000円 (通常23,100円) 【3級】 12,000円 (通常34,650円) 高校生を対象として就職に役立つ資格取得を支援するための特別価格です
研修会場	各学校の教室等 催行可能な人数については、お問合せください。

【お問合せ先】 一般財団法人建設業振興基金 経理研究・試験担当
TEL 03-5473-4581 (土日・祝除く 9:00～12:00、13:00～17:30)
E-mail gy2@kensetsu-kikin.or.jp



建設業と技能者を支える新しい仕組み 建設キャリアアップシステム(CCUS)

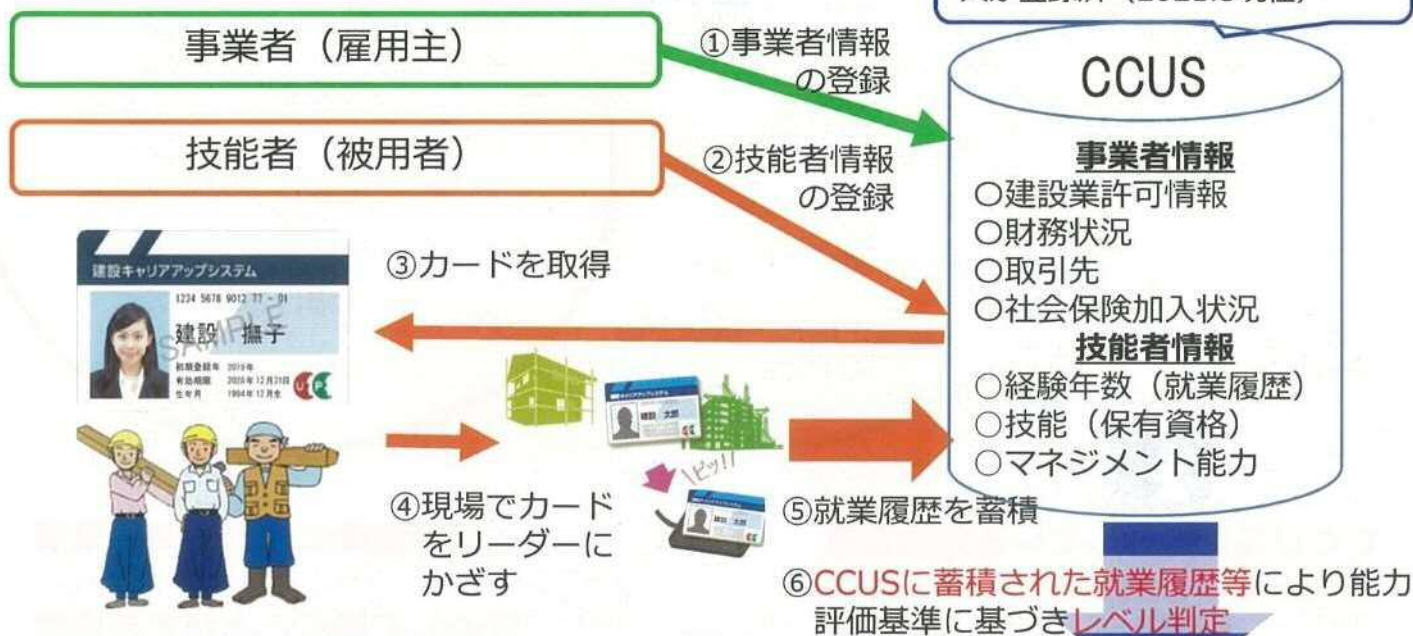
Construction Career Up System

建設キャリアアップシステム(CCUS)とは

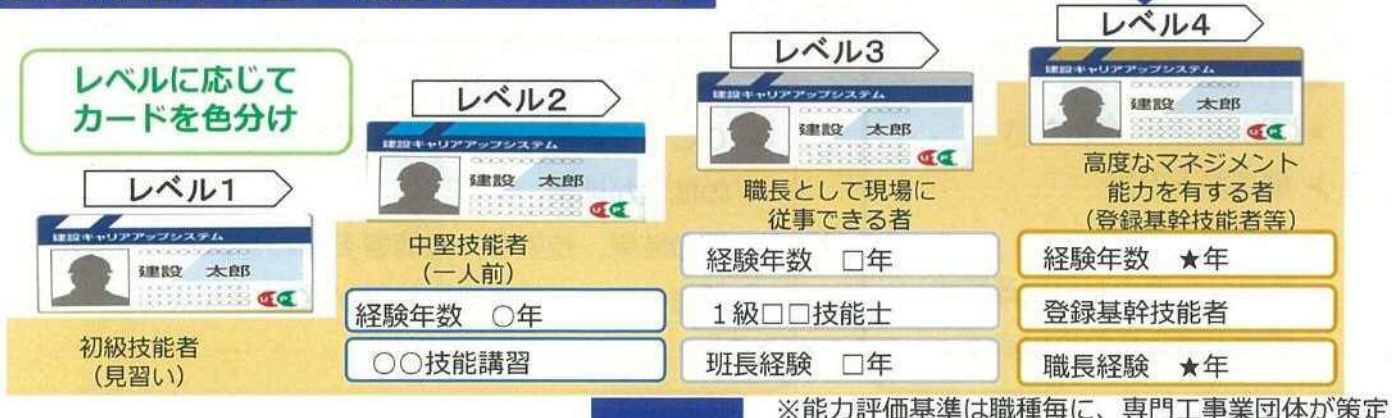
- ◆ 建設キャリアアップシステム(CCUS)は、技能者(職人)の方が現場で就業した履歴、保有する資格、社会保険の加入状況などを業界横断的に登録・蓄積する建設業界独自のシステムです。
- ◆ CCUSは、若い世代にキャリアパスと処遇の見通しを示し、技能と経験に応じ給与を引き上げ、将来にわたって建設業の担い手を確保していくため、国土交通省の主導のもと、建設業界を挙げて推進しています。

CCUSによる業界横断的な経験・技能の蓄積

事業者約10万社、技能者約52万人が登録済(2021.3現在)



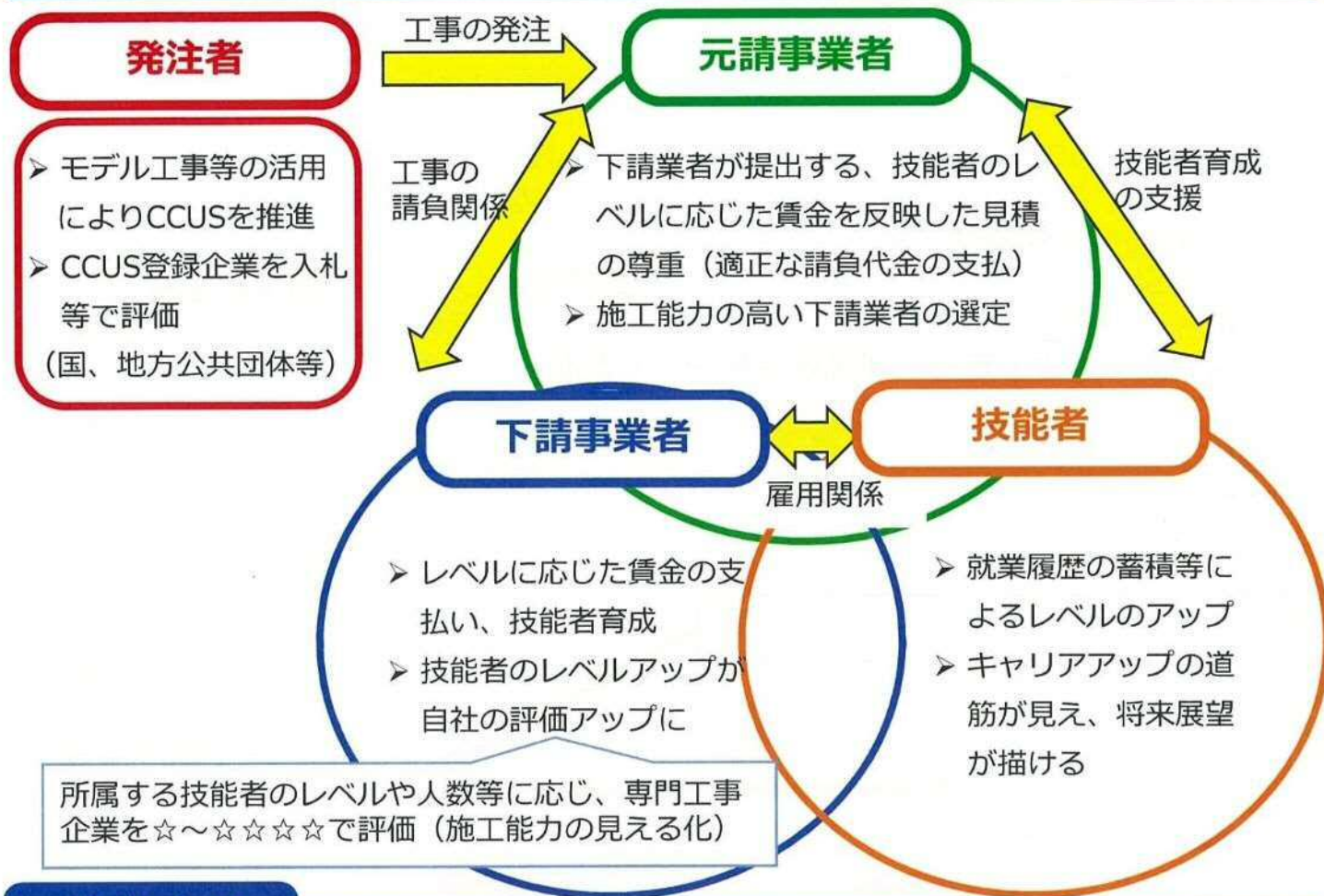
能力評価基準に基づく技能者のレベル判定



専門工事業団体(2021.3現在7団体)においてレベル別の賃金目安が設定されるなど、技能者のレベルに応じた処遇実現に向け、環境整備が進められています。

ポイント1

CCUSは、**国の主導のもと、発注者（国、地方公共団体等）、建設業界を挙げて推進**しています。



ポイント2

CCUSに登録している建設企業は、技能者を含めた業界全体の人材育成に理解を示している企業といえます。建設業で働く全ての労働者の賃金や社会保険など処遇面に配慮していることが伺えます。すなわち、**安心して働くことができる建設会社**であり、**生徒の就職先として有力な候補**となり得るものです。

建設業は…

- 将来の道筋が描けない
 - 雇用が不安定
 - 仕事がきつい
- こうした理由が早期退職の要因と考えられています。

CCUSに登録すると…

- CCUSを活用する工事が増加しており、受注機会の拡大が期待
- その結果、技術者・技能者を問わず、雇用の安定、賃金のアップ等の待遇改善が期待

CCUSホームページはこちら <https://www.ccus.jp/>

CCUSに関する動画はこちら <https://mem.ccus.jp/learning/view/25/guest>

CCUSに関するお問い合わせは、電話 03-5473-4586

工業高校在校生の皆さん!



建設キャリアアップシステム

CCUS

Construction Career Up System

を知っていますか?

CCUS = 「建設キャリアアップシステム」とは一
国と業界が総力で取り組む **建設業界だけ**の
人を大切に育てる 新しいシステムです。

このマークが
参加企業の目印!



今、若い人材を育てようと
企業が続々システム登録しています。

CCUS ホームページはこちら!



すでに約80万人の
職人さんが参加!



このカードが
あなたの未来を創る!



建設業で働く
あなたを守る!



CCUS 参加企業は 人にやさしい企業です。

建設キャリアアップシステムの仕組みとメリット

建設業で働いた履歴や資格
受講講習など、さまざまな
キャリア情報を記録！

建設技能者（職人さん）が「いつ」「どこで」「どの企業と」「どのような」仕事をしたか・取得している資格・表彰・受講講習などをキャリアアップカードに記録。

2019年4月にスタートしてから、
現在約50万人の職人さんが参加しています。

経験や資格に応じて
カードのカラーが
ステップアップ！



最高位はゴールドカラー！
日本全国で通用する一流技能者の証です。
現在、能力アップに応じた賃金アップの実現に取り組中。

今、若い人材を育てようとする建設会社が
続々と「建設キャリアアップシステム」に加入しています！

- 住所や職場が変わっても、カード一枚であなたの職歴・資格・身元などが証明できるようになります。
- 公共工事などで働いた日は、自動的に退職金が積み立てられていきます。（対象現場の拡大に取り組中！）
- 超過勤務、健康被害、労働災害、賃金未払いなどが起きた時に、あなたを守る証拠になります！

大切な将来の選択にあたって

建設キャリアアップシステム

をぜひ知ってください。



CCUS 参加企業は 人にやさしい企業 です。



CCUSチャンネル



で検索！



人材協定期便はメールでの受け取りが可能です！

年三回お届け予定
(各学期)



人材協定期便



情報共有が容易に！



人材協定期便のメール受け取りをご希望される方は、下記項目をメールにてご送信下さい。

- ✓ 学校名
- ✓ メールアドレス
※組織の代表アドレスをご記載下さい※
(例：“進路指導室”<・・・@.co.jp>)
- ✓ 担当者名
- ✓ 電話番号

送信先メールアドレス

jinzai@kensetsu-kikin.or.jp